



花

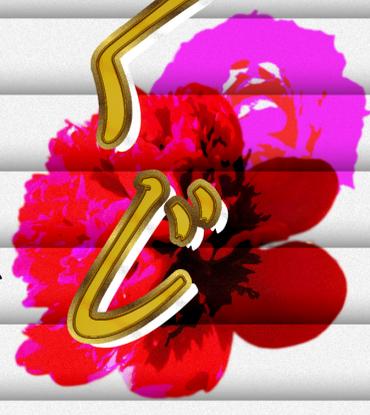


カ
フ
エ
宝



日溜。 有坂
蚯蚓の紐 片桐天音

く
じ



花・カフェ・宝くじ

日溜。
蚯蚓の紐
有坂
片桐天音

もくじ

ラク☆ラク

六文銭

チャネル0

フォーチュン・ポップコーン

表紙デザイン——ごまふわラビ

ラク☆ラク

日溜。

うんのないおじさん

わたしのおじさんは「うんがない人」です。こどものときから、えんそくの日にかぜをひいたり、目のまえでかってもらいたかったゲームがうりきれたりしてたそうです。大人になってからも、しゅうしょくさがきまったのに会しゃがつぶれてしまったり、いろいろうんがないそうです。

わたしはこのまえ、たかいからだめとママがいついたゲームをかってもらいました。中古でやすくなつたのでうんがよかつたそうです。

わたしはうんがいいので、おじさんがこまっていたらわけてあげようと思います。

*

「……「あたる」ってのはまあ、必ずしも良いこととは限らん」

「おめでとうございます！ あなたは当選しました！ 報酬を受け取るにはこのリンクをクリック」

「そういうのはそれ以前の話だ。当たってねえだろ。刺身

喰って寄生虫で腹痛とかもアタリ」

「ざあござあこ。うだつがあがらない、一周り下の子供に説教垂れる」

「……ナマなカキつてか。……大概オッサン臭いな」

「当たりだけど！ Zのワードなのでペナルティ！ 打つべし、打つべし！」

「当たるなよ……本題良いか？」

「いーよ。なんか顔色悪いし、本当に食べ物に中ずつた？」

手、震えてない？」

「これ、ちよつと確かめてくれ」

震える叔父の右手にあったのは番号が印刷された紙切れ。そして左手は何かの Web サイトが開かれたラップトップ PC を指し示している。

「えー。……買ったの？」

宝籤なんてそれこそ運任せのものを、という言葉は飲み込んだものの、言わんとしたことは初音の声に滲しみんでいた。

見なくても分かる、と続けようとして。『自他共に運が悪いと認める叔父が買い、常に無い程緊張している』

ということに考え至る。それに入試試験の結果でもあるまいし、これから初めて結果を見るというものではなく、追認をしたいのだろう。

——叔父の緊張が初音に移ったのか、僅かに揺れる体で——見る。画面上の、結果を。

*

「えっそれで当選金を元手にこの喫茶店始めたってことで
すか？　そういうのあるんだ」

「いや、このお店の元手は当選金じゃないよ」

「え、違うんですか初音さん」

咲良ちゃん——この、新規に開店したばかりなのに鄙びた空気の喫茶店の貴重な常連——は打てば響くような反応をしてくれるので、話していて楽しい。あまり普段は開示しない話をしてみたくなる程に。一人で珈琲を啜っているときは周りの音が自然と遠ざかるような雰囲気があるの、割と意識的に会話をしているのだろう。そうしたちぐはぐさが、この喫茶店へ惹きつけられた理由かもしれない。そんなことを本人に尋ねるような仲で

はないけれど。

*

手元の紙に印刷された番号と、Webサイトに表示された番号を一字ずつ確かめる。普段なら声に出しつつそうしたであろうことを黙ってしたのは、何かの予感があったからか。

最後の一桁まで見て、もう一度。もう一度。もう一度。もう、一度。

「……合ってないよ、叔父さん」

私の声は、少し上擦っていて。

「そうか。……そうか」

叔父さんの声は少し低くて、でも落胆したというより、安堵したような柔らかさがあった。

「もー、叔父さん運が無いんだから、お金の無駄だよ？」

「いや、こういう金は公共事業なんかに使われるんだから決して無駄になるワケではなくてな？」

「寄付したいんなら自分の名義で分かるようにやったら良いんだよ」

いつもの空気が戻ってきたのを感じながら。

私は、紙の番号と全ての桁が揃ったWebサイトのページを閉じた。

*

咲良ちゃんが苦い顔をしている。ロブスタ種をブラックで飲むのが好きな彼女だから、こういう顔をするのを見るのはちよつと楽しい。

「訊いてきたのは、叔父さんが副業でやっている喫茶店で私が働いている理由でしょうか？」

「いや、なんというか。外装が綺麗な筆筒を買って、家で抽斗を開けてみたら中が腐っていたというか」

「比喩でキツイ表現を避けようとして失敗してるね？」

誤魔化すように、咲良ちゃんはカップに残った珈琲を一気に飲み干した。普段の彼女からはかけ離れた行動だ。耳にかかるかかからないかくらいの短髪、くりくりした瞳で、健康的な日焼け跡が眩しい彼女の外見のイメージとは合っているが。

「……こう、ラブというヤツなんですかね？ ソレも」

大きく息を吐いた後、唇を尖らせ、先刻よりも遠い場所を見る目でそんなことを言うから——笑いが堪え切れなかった。それこそ珈琲を初めて飲んだ子供のような草だったから。

「ぶっ……ふふ。いや、『ラブ』て」

頬を膨らませた彼女を前に二分程笑い続け、目線が冷たくなってきた辺りで切り上げる。

「いや、アガペーかな？」

そう返すと冷たかった視線がぐんによりしたものに変わった。

丁度予備校へ行く時間になったようで、お会計。もう来てくれなくなるだろうか。

「……来ますよ。フリーっていうのは分かったし」

聞こえなかったことにしよう。扉の開閉でベルが鳴っていたので。

*

「正しくは、運というものを信じていないんだよ、僕は」
そう言って、彰彦^私は半分程残っていたグラスの中身を

喉へ流し込む。

「結果には原因がある。遠足の日に風邪をひくなんてのは前日までの素行や環境要因に依るもので、半数が選ばれる仕組みがあるなら当然半数は選ばれない。セックスしなければ受精はしない」

神か詐欺でも無ければ、と酒臭い息を吐き出す。

「それでも確率っていうのは否定されてないですよ。幸せになれる方に傾くことが多いならそれは『幸運』とって良いんじゃないですか？」

佐々木君は去年から唯一の新入社員ということで幸田商事では多くの社員から食事に誘われ奢られている。

『素直で元気な後輩』と評したときに日本社会で共有されるような幻想のイメージとは異なるが、理路整然と見解をハキハキ述べる様はこれはこれで『素直で元気』と呼べるのではないだろうか。何にせよ彰彦もこうして彼と食事を伴っている通り、結構気に入っているのだ。

「それはそうだ。『幸せ』とは何かを置いておいて、その機会が多かったことを幸運と呼ぶのは問題無い。『これから』をそう呼ぶのが気に入らない、それだけの話なん

だよ」

「まあ、それなら分からなくてもいいですが。……えーと、そう。話を戻していいですか？」

「副業の理由と姪がそこで働いている理由で良かったかい？」

「え、繋がるんですか今の話と」

「勿論」

佐々木君が面倒臭そうな顔を隠さなくなった。それでも奢り分、話は聞いてもらおうか。

「いやなに、僕に運が無いとことあるごとに持ち出してくる兄夫婦の娘に、適当に買っておいた番号に合わせて作った Web ページを見せたらどういう反応をするかを試してみたくくなってね」

「は」

佐々木君の手が止まった。折角なのでその最後のトリ皮串は貰ってしまおう。

「当たってない、と不自然な程震える声で言って、それから何だかしおらしくなってしまったんだ」

佐々木君の反応が無い。珍しいな。最後のネギマも

「喫茶店はほら、主な業務の関連だと保険としては心許無いので前から探してたんだよ。できれば居抜きが良かったんだが。まあ、結婚を考えなければ家一軒は何とかなる」

「……結婚を機に家を買う人がほとんどだと思いますが」
佐々木君が戻ってきた。子供の養育費の累計なんかはまあ家一軒に匹敵するでしょうね、とこちらは理解できるようだ。

「で、しおらしくなっていた姪さんを彰彦さんが主業務をしている間の人員として確保した、と」

再び長考する佐々木君。一度席を外し会計から戻ると、漸く口を開いた。

「時期がずれているにしろ、宝籤の件、彰彦さんの運試しだったのでは？」

枕にした話と繋がったらしい。

「いや、そうなるかも知れないしそうならないかも知れないことを試行しただけだよ。少なくともアテにはしていないさ、そんなこと」

釈然としない様子佐々木君と店を後にする。しかし旨かった。『運を信じていない』なんてのはその程度の話で、確率や試行自体は対立するような軸ではないのだと。大体、親族の経営する店で働くかどうかなんて、独立した試行というヤツだ。宝籤のときの話をしたのなんて、酒のアテにするのに下拵えを加えた程度。

明日と明後日は喫茶店の主としてそこそこに働くのだ。酔った勢いでした話の繋がりなど、眠りと共に流してしまうに限る。

＊

咲良ちゃんが去り、数人の客が去った後で。ちょっとした蛇足。

「叔父さんの家に行く前に、私が買った宝籤の番号確かめてたんだ。二十万当たってたけど。……あのやり取りの後じゃあ、換金に行けないよねえ」

叔父さんより先に切り出さなかったのは、本当に運が良かった。

そう呟きながら、初音は『OPEN』の札を裏にした。

花を持たせたのは果たして、ということぞ。どっとは
らい。

Lackluch Fin.

六文銭

蚯蚓の紐

「なに、炎上したことあんの？」

カウンターに直立不動する痩せこけた金髪の男は、申し訳無さそうに頭を垂れ、ハイ……と小声で呟いた。

店先の奥にぶら下がる鳩を失った鳩時計は、小窓の開閉音だけでパカパカと正午の始まりを告げる。陽の光すらも迷い込まない電気街のその奥に、切れかけの蛍光灯だけが店内を灯す「六文銭」。その時代遅れな貧乏質屋の若女店主・千草七海は心底呆れた表情を浮かべつつ客の相談を聞いている。赤い襦袢の腹ポケットから黒い合皮の手帳を取り出し、ボールペンの先を軽く舐めてから彼女はメモを取り始めた。

「なーんだ……そういう面白いコトは早く言ってもらわないとサ。それでもってお前さん、一体何やらかしたのさ？」

彼は高校生の頃、某有名回転寿司チェーンにバイトとして勤めていた時の失態を淡々と語り始めた。

曰く、まだ食べられるご飯を残すな、決して捨ててはいけないよ、という厳格な母の厳しい教えを、戒律のように幼少期から彼は守り続けてきたが、寿司屋における

日常的な食品廃棄の実態は、到底見て見ぬ振りもできず、かといって意見を申せる立場にもあらず、彼の脆弱な精神は日々石臼で削るかの如く磨り減っていったそうだ。

ある日のシフトの終わり際、彼はいつも通り残飯処理のため、ゴミ箱の中を覗き込んだ。イクラの橙や、ヤリイカの白や、マグロのくすんだ赤みが織りなす、つい先程まで色鮮やかな海鮮の幸だったものたち。それらは今日たまたま誰にも食べられずこの掃き溜めへとついに流れ着いたが、あまりにも不憫でたまらなかつたらしい。

彼は厨房からおたまを持ち出し、ゴミ箱からちゃんぽんとなったそれを一杯すくい、炊きたてホカホカのご飯の上に乗つけて食べてしまったのだ。

彼が炎上に巻き込まれたのは、その様子を見た心無い同僚が、動画に収めてインターネットの大海原に放流してしまったからだ。両目に大粒の涙を浮かべ啜り鳴く声を漏らしながら、廃棄処理物の海鮮丼をバイトが食べる六秒の動画には、独特の不快感と不気味さがあり、一時期は深層ウェブから発掘された動画ではないかと噂され

ていたが、特定作業が進み男の身元が判明すると、小火にからつ風が吹き込むかの如く話題を呼んで炎上した。

炎上当初は僅かながらも、食品廃棄ロスを訴えるため彼はわざと炎上したのだ、彼は被害者だ、という擁護意見も散見されたが、時間の経過に伴って、この寿司屋では廃棄物もお客に提供するのですね、もう二度と行きません、などの多数派意見によって見事にも消された。結果としてその回転寿司チェーンは謝罪文をホームページ上に掲載し、高校からは一週間の停学処分を下され、自分の本名で検索すると結果のトップにその炎上動画のサムネイルが表示されるようになった。それはもう見事に、かき消すことのできない立派なデジタルタワーが刻まれてしまったのである。

あれから十年。

高校を中退した彼は、今後何人たりとも自分に対して後ろ指を指す人間が現れぬよう、地元でも二人と類を見ない立派なヤンキーとなった。しかも不良同士で結婚までした。だが定職にも就かずブラブラとその日を暮らす人間にとって、現代社会はちよつとどこるか本当に生き

づらくなってしまうた。借金の返済滞納をやらかした結果、いわゆるブラックリストに乗り、赤ん坊を養うための資金繰りで途方に暮れていた男は、「炎上動画が金になる」というこの質屋の冗談のような噂を聞きつけ、いてもたってもいられずにここまで駆け込んできたという。

「ふーん、ま、そこまで詳細に語ってもらわなくても十分だったんだけどサ、ま、いいや。じゃ、始めよっか。その炎上動画って……お宅の顔は映ってる？」

男は怪訝な表情を浮かべつつ、ええ、まあ……とだけ答えた。

「じゃあ動画内顔認証で確認が取れば、出演者であることを立証できっかな。えーつと……ハイハイ、『海鮮丼 炎上』で見つかったわ。この動画ね。じゃあちよつとこのカメラを覗いてもらえるかしら」

顔認証の検証結果は、正当性スコア〇.〇〇から本人であると判断した。

「はい、じゃあ確認とれましたんで、早速この動画に対してNFT⁽¹⁾を発行しちゃいませよっかね」

男は「NFT」という単語が出てきて一安心したように、憚りなくそれはおいくらですかと七海に尋ねた。

「今回はランクA相当の炎上動画ですから、eー質屋⁽²⁾におけるNFTの標準査定金額として算出すると、えーつと……一八万千円を融資させて頂きます」

男は心底驚いたように査定金額を復唱した。

「ま、お宅からすると、何も無いところから金が湧き出たようなモンでしょうね。じゃ、一応説明しておきましょうか。このNFTってのはね、写真、動画、アート、あらゆる『作品』と名のつくデジタルデータに対して発行できる、いわば権利書みたいなもんなんですわ。人気があれば二束三文にしかならないけれど、多くの人が注目すればするほど価値の上がる権利書。ようは株券と一緒に。特にこの炎上動画ってやつは、性質上多くの人の目に触れやすいから、そもその価値が高めに設定されているってワケ」

でも炎上動画なんていくらでも転載されますし、そんなもんに価値なんて無いんじゃないかと男は続けた。

「だからデータそのものじゃなくて、データの権利をや

り取りしてんのよ。そもそもデジタルデータってのは複製が可能だから、そのコピーは拡散することによって誰でも利用できちゃう。デジタルの黎明期はそれを防ぎたいから、頑張ってコピープロテクトを施したり、法律でコピーを禁止したりでなんとか対処していたわけけども、結局そういう対処法ではコピープロテクトと違法複製のイタチごっこを続けることにしかない、って結論に落ち着いたのさ」

七海は一息でバーっと説明してから、冷めきった紅茶を一口流し込み、喉を潤してから説明を続けた。

「んで。どっかの頭のいい人が考えたわけだ。じゃあデータそのものが拡散するのは仕方がないとして、複製されたデータまで含めてゼーンぶ所有権を主張できるようにすれば、そのデータは所有者によって保護されている、と言っくいんじゃないかって。だからデジタルデータの権利書っていう考え方が生まれてきたのよ。ほら、道の駅とかで売ってる野菜と同じよね、私がこのデータの生産者です、みたいなの」

まあなんか難しい話はもうよく分からないですけど

も、ブラックリストに乗っていてもその融資は大丈夫でしようか、と男は続ける。

「あーいいいよいよ。ウチはあくまでNFTを発行して、それを担保に『質入れ』してお金を融資しているだけだからね。一ヶ月以内に返済しなかったらこのNFTはウチで好き勝手使わせてもらうから、特に連絡はしないよ。いちおう普通の質屋と一緒に、利子込で借入金を返済して貰えばNFTの返済、つまり『質請け』もできらってワケ。とはいえ、ここ最近のNFTはあまりにも市場が複雑すぎて、安値で買い叩く中国系業者も多いから、NFTを適正価格で買い取ってくれる取引所を調べるだけでも一苦労なのよ。もう近ごろは個人でNFTを取引するお客さん、あんまりいなくなっちゃったねえ」

昔は個人でもNFTの取引をよくやってたんだけどね、と七海は小声で呟いた。

「ってことで、同意頂けるといふことでよろしければ、早速手続きを始めちゃいますかね。まずNFTを代理で発行して取り扱うためには、法律上NFT取扱資格者に

よる説明が必要なんで、ちよーつとばかり眠たい話に一時間ほど付き合ってもらおうかな」

男が露骨に苦虫を潰したような表情を浮かべたのに応じて、七海は声色を柔らかくした。

「ああ、まあ大丈夫。話は覚えてなくても、聞いたふりだけしててくれればいいから。大学の講義じゃないんだから、別に後でレポートを出せってんじゃないよ」

＊

鳩時計は扉の開閉音で、午後三時を七海に告げた。

そろそろ眠気に打ち勝つため、七海がコーヒを淹れる頃合いだ。七海は立ち上がると、店奥の冷蔵庫の中から豆用の麻袋を取り出し、コーヒースプーンで一杯すくってミルに入ると、店先に人影を感じたので、もう一杯すくってミルに入れた。

「おうナナミ、ブラックで」

(1) Non Fungible Token の略称。

(2) NFTの質入れを取り扱う質屋。七海の店のように、通常の質屋を兼任することも多い。

「うちは喫茶店じゃなくて、質屋なんですけどねえ……」

瀬戸璃央せとりおという男はNFTマネージメントコンサルティングという怪しい職名を名刺に記載していたが、要するにやっていることは「せどり」である。eー質屋から安価でNFTを買いたたき、ダイヤの原石に見つけ出しては意図的にバズを発生させ、価格が高騰している間にNFTを売り払う。あるいはコンサルティング業務と称して、お客にNFTでせどりをやらせて、その利益を掠めるようなこともやっていた。彼の仕事は一昔前の表現を借りるならば転売ヤーとしてネットで叩かれていただろうが、今ではそれが立派なビジネスとして成立している。こういう曖昧さがあるからNFTという業界はよく分からない、と常日頃から七海は訝しんでいた。この瀬戸璃央という男はあちこちのeー質屋まで足を運び、面白いNFTが転がり込んでいないか確認することを日課としていた。

「はい、コーヒー。瀬戸くんさア、毎日コーヒー飲みに来てるけど、そろそろ豆代ぐらいは負担してくれてもいいんじゃないの？」

「なに抜かしやがんでい、その分このガラクタ質屋からケツも拭けねえようなNFTを買い上げてるんじゃないか」

確かにeー質屋にとってせどり屋の存在は、本来であればより高値がつくはずのNFTを買い叩く厄介な業者、とも見なせる。しかし価値が玉石混交に入り混じったNFTをまとめて買い取ってくれる大事なお客でもあるため、なかなかおいそれと無下にはできない。逆にせどり屋にとって、本来であればNFT所有者と直接交渉できれば質屋から中間マージンを取られずに済むが、NFTの意図的な価格上昇には不確定要素も多く失敗のリスクが高い。そこでeー質屋にべったりと張り付いて新規のNFTをまとめて安値で買い取るにより、リスクの軽減を図っているのだ。

質屋は客からNFTを寄せ集め、せどり屋は質屋のNFTを厳選し、客はせどり屋から高品質のNFTを購入する。客、質屋、せどり屋が三すくみとなって互いの領域に侵犯しないことで、成熟したNFT市場は絶妙なバランスを保っていた。

「そのガラクタから大当たりを引き当てるのがあなたの仕事でしょうが。今まで何本当てたんだけけ？」

「……百万円相当が……二本」

「ハア、シケてんねえ。この仕事を数年も続けてりゃ年俸千でも億でも固いつて、確か始めた頃はそう呟いてなかった？」

「うるせえやい。どこの貧乏質屋を慈善活動だと思つて施したら、こっちまで貧乏が感染つちまつたじゃねえか」

「ハア、その貧乏質屋の美人女店主にまだ惚れ込んでいた頃の瀬戸くん、可愛かったのにナァ……特に、ベッドの上とか」

璃央がむせた。彼は茶髪でチャラチャラとした遊び人のような見た目をしているが、セックスに関しては絶望的に下手糞という弱みを、七海だけが握っていた。

「……ごほん、それはそれとして七海様。本日入荷のNFTは？」

「そうねえ。トレーディングカードトークンの低額NFT詰め合わせに、個人ライフログ六十年分、あとは

今年話題になったミーム動画の切り抜きブルーバック素材……」

「シケてやがんねえ。まあいつも通りランクA以上のNFTは一通り買っておくから、後で領収書だけメールで送つてくれ」

「まいどありー。あー、あとアレね。炎上動画。なんか十年前の、廃棄物で海鮮丼作るやつ」

「うわ、あったあった。まーた懐かしいモンを。ま、でも炎上動画のNFTなら買い手は既に決まったようなものか……」

「そうそう、炎上動画紹介の人。最近登録者数が百万人超えたつて喜んでたわね」

動画配信者ほどのeー質屋にとつても最大手のお得意様だ。eー質屋の売上は、何人の配信者様をお抱えできるとかに掛かっている、と言つても過言ではない。配信者側からすると、NFTを買い取る事によって話題の種類にもなるし、何より動画の所有権が手元にあるので、動画の出演者による権利者削除申立を回避できるという安心感がある。だから彼らは多少お値段の張る動画であつ

ても、ネタが新鮮であれば気前よくNFTを買い取ってくれるのだ。

「でも最近問題になってんだろ？ 炎上動画が再発掘された結果、過去に炎上した人間がまた個人特定されて、再炎上してSNSで叩かれたり住所特定されて引っ越さざるを得なくなったり」

「そうらしいわね」

「そうらしいって……ナナミ、お前さんそのリスクまでちゃんと説明したのか？」

「別にいらないでしょ。『六文銭』では彼の人生における汚点を高値で買い取っただけなんだから。その汚点が誰の手に渡るかなんて未確定だし、下手したら顧客情報に関わるから喋れないっての」

「ええ……」

「それにちゃんと説明したわよ。動画をNFT化した時点で、他人への所有権の譲渡に対する拒否権を失うて。お客さんも喜んで帰っていったし、アタシは売上が伸びたし、お互いにウィンウィンじゃない」

「はあ、つたく、おめえってヤツはなあ……」

璃央は呆れ返ったのかため息をつき、コーヒーを一気に飲み干した。

「悪いが道草食ってる場合じゃねえ、他のeー質屋も回らないといけねえんだ」

「そういや今更だけど、瀬戸くんって何でリアルにeー質屋を駆け回ってるの？ ウチにもヨソにも質草⁽³⁾一覧を一般公開してるポータルサイトがあるじゃない」

「いやいや……だって、あそこはまだ載せてないとおきがあるかもしれないだろ？ それに、家でパソコンポチポチして探すのは性分に合わねえんだ。やっぱせどり……じゃなかった、NFTマネージメントコンサルティングは足で稼がねえと、じゃ、コーヒーごっそさん」

飯の種がもう無いと分かると、璃央は立ち去るのが早い男だった。

「あら、もう行っちゃったよ。難儀な男だねえ……」

*

鳩時計は扉の閉閉音で、午後六時を七海に告げた。

脱法電子タバコや違法5Gアンテナなどを取り扱うア

ングラな販売店がところ狭しとぎゅうぎゅうに並び、それらを求める人々でみっちり詰まるこの電気街も、この時間になるともう歩行者の数はまばらになってくる。ぼちぼち店じまいにしようかと、七海は暖簾を降ろしに軒先まで出たところで、女が一人こちらに向かってくるのを目にした。

手元の地図を頼りに不安げな表情を浮かべるその女からは、治安のよろしくないこの電気街に初めて訪れた様子が伺える。でなければ、灰色のノースリーブタートルネックにダメージデニムという、妙に露出の高くて色っぽい着合わせなどは選択しないはずだ。もともとの女っ気の少ないこの通りでそのような格好などしてみれば、このように、軒先の男連中からガラガラとした視線を注がれるのも止むを得ない。

女が近づくにつれ、その容姿の詳細が明らかになってきた。

最近美容院からは足が遠のいているのか、クセっ毛やボサっきの目立つロングヘアはだいたいぶおぎなりにされているようだ。お洒落なのか安いからなのか、組み合わせ

がよくわからないパンプスはすでに汚れが目立ってしまったている。人を見た目で判断するのはよくない、とは言われるが、七海は商売柄、こういった外見への投資を惜しむ人間が最終的にe-質屋へ流れ着くのを経験的に知っていた。とはいえ、着ている衣服は遠目から見てもブランド品であることがよく分かり、決して作りの雑な安物ではない。かつての栄華と現在の衰退。七海から見えてそんな言葉がよく似合いそうな女だった。

女が地図から顔を上げると、一瞬、七海と目が合った。彼女は探していた店を見つけた喜びで表情を明るくした後、暖簾を下ろす様子から店じまいを悟り、一気に表情を曇らせた。

「あの……」

女が弱々しく小声を漏らす。口角の両端が下に向き、八の字に垂れ下がった細眉、血色の悪そうな青白い肌、そして遠慮しがちな上目遣い。全ての顔面上の要素が見事に調和し、「辛薄そう」という彼女の印象を七海に与えた。

(3) 借入金の担保としているNFT及びそのデジタルコンテンツ

「ああ、まだ大丈夫ですよ。ようこそ、eー質屋・六文
 銭へ。お伺いします」

普段であればもう閉店なのでまた明日、と言って冷たく客を追っ払っていた七海だが、自分と同年代の客という親近感が相まったのか、それとも普段から債務者や社会不適合者ばかり相手にしてきた反動からだろうか、七海の接客にはいつもの対応とは異なる優しさを含んでいた。

「ウーン……」

七海は女から個人用認証キー⁽⁴⁾を預かり、認可を経て各種SNSサービスに目を通したが、ざっと見たところ、あまりNFT的に価値のあるめばしい代物は見当たらなかった。

彼女が頻繁に利用していたのは、老舗の写真・動画投稿サービスだ。「ちしゃネコ」というユーザー名で投稿されているデジタルデータ達は、直近の数年分では旅先で撮ったと思わしき風景や景色がずらりと並んでいたものの、徐々にスクロールしていくと、ある時点を堺に華やかな自撮りが一気に増えた。主に固定された面子の複

数男女が、シャンパン片手にクルーズでパーティを楽しむ様子や、小料理屋で美食を堪能する様子などが次々と表示される。

「いわゆる……港区女子でしたの、私」

今まで無言を貫いていた女がようやく口を開いた。

「港区女子？」

「ええ……高収入の男性からご支援頂いて、港区を中心にラグジュアリーな生活を楽しんでおりましたの。今となっては死語ですけど」

「へエ、港区女子。世の中にはいろんな女子がございませうねえ……」

とはいえ金持ちが集って金持ち自慢している写真などに一銭の価値もない。せめて際どい水着でバカンスを満喫している写真などあれば一定層に需要はありそうだが、そういった類も見当たらない。

「あとそれ以前は……ああ、高校生の頃の写真も残してんのね、へえ、いいじゃない、女子高生」

「ええ、ミッシヨン系の女子高に在籍しておりましたの」
 「女子高生同士でイチヤイチャしたり、ふざけあってパ

ンチラしてる動画とか残してないの？ その手の愛好家には高く売れるからさ」

「……」

一瞬の沈黙が来訪し、七海が思わずやっちゃった、という表情を浮かべる。七海にとっては日常会話程度のおすぐりのつもりだったが、お嬢様にこういった下々の話題はタブーだったのだろうか。

「あ、いや、えーつと……」

「いえ、そういったご学友が映っておりますプライベートな写真は、全てローカストレージに保存しておりますわ」

「え……？ ああ、そうなの……うん、プライベート意識が高くて結構結構……」

なんか調子狂うなあ、と口にする代わりに、七海はポリポリと頭を掻いた。

その後も七海の査定は続き、女子高生時代の前略プロフィール、港区女子時代にバズったヤバイ客に関するツイートの、旅先の風景写真まとめにしろろろじて価値が見られたので、それらをNFT化し、現金価値にして七千円ほど

の評価額を女に融資した。

「うーん、ま、ちよつとしよっぱかったかねえ」

「いえ、それでもありがたいでございます。おかげ様で今月の生活費の足しにはなりそうですので」

女は大事そうに現金をラベンダーピンクの長財布へと押し込んだ。きつとこの財布も、当時の男性に貰いでもらって手放せない思い出の一つなのだろう。

「また何か価値が付きそうなデータ見つけたら、ぜひ持ち込みにいらつしやい」

「はい、そうさせていただきます。ではこれにて失礼」

女はスツと立ち上がり、百八十度その場で回転してスタスタと去っていった。

かつての華やかな生活から今は遠のいているものの、プライドまでは落ちぶれていない。この六文銭を訪れるにしては珍しいタイプの客だ、と七海は思わず感心させられた。

(4) かつて利用されていたパスワード認証は概ね廃止され、現代では政府発行によるマイナンバーUSBトークンを用いた認証へと一般的に置き換えられている

*

「に、二度とこんな店来るか！」

という劈くような怒鳴り声が、鳩時計の開閉音すらもかき消す午後三時。怒りで肩を震わせる金髪の男が、六文銭から立ち去る場面にちょうど璃央は出くわした。

「あちゃー、何やらかしたんだよナナミ。あの男、めちやくちや怒ってたじゃねえか」

七海の表情からは疲れが見える。

「ああ、アレはこの前の海鮮丼男。色々と似たような悪事を動画に収めてきたから、この前と同じ値段で買い取ってくれって。流石に全部お断りね」

「ははあ、しょうがねえや。ああいう新参のお客様は、何に対してNFTの価値が付与されているのか分かっちゃいねえからな。ちなみにどんな動画を？」

「ひどいもんよ。ゴミ収集の前夜にゴミ出ししたり、コンビニのでレギュラーサイズのカップを購入してラージのコーヒーを入れたり、スーパードで牛肉を買っていないのに牛脂をカゴに入れたり」

「み、みみちちすぎる……」

「そんなのが三十本近くも」

「苦行すぎる……」

「それでアレも査定ゼロ、コレも査定ゼロって判断してただけど、そのうちに海鮮丼男がイライラし始めて、やい、そうやって人様が汗水垂らして撮影してきた動画の価値を勝手に判断しやがって、こちらこれ一本で食べていこうという決意すら固めて真剣に用意してきたと言うのに、俺の行動に何の意味もないとでも言いたいのかって聞かれたから、あ、はいって答えたら、そのままブチギレて大声で泣きながら帰っちゃった」

「怒りっぽいんだか、豆腐メンタルなんだか、そもそも見通しが甘すぎるんだか……」

とりあえず受け取った動画を一通り垂れ流しながら、逆にこのしょうもない悪事まとめ集はシユールさを武器にバズらせることができないか、いや、面白くないコンテンツを面白いものとして持て囃す風潮は一巡して過ぎ去ったしやはり無理なのは、などと七海と璃央の二人で喧々譁々続けていると、店先に来客があった。

「あの、ごきげんよう……」

「ああ、どうも。先日の港区女子さん。ごきげんよう」

七海は思わずごきげんようで返してしまった。

本日の港区女子さんコーデは、フレアラインが綺麗に映える黒のロングワンピース。露出は低いが相変わらずノースリーブだ。きつと港区女子さんはこの手の、男ウケが良くて若干のあざとさが見え隠れする衣類に関しては、クローゼット内のバリエーションが豊富なのだろう、などと七海は邪推した。

「実はNFT、でしたっけ？ 動画を持ち寄って参りましたので、端金にでもなりましたら、と」

「いいですね。では早速拝見させて頂いても？」

「えっ、あっ……えーっと……」

港区女子さんが一瞬視線を璃央の方に向け、一種の遠慮とも表現できるような困惑の表情を浮かべたのを、七海は見逃さなかった。

「ああ、それでしたら店の奥のPCで確認させていただきます。ほら、お客さん来たんだから瀬戸くんは早く帰って帰って」

「ええー……俺、まださっき来たばっかなんだけどなあ。せっかくこんな別嬪さんがいらっしやっただというのに、コーヒーの一杯もご一緒できないなんて……」

「せどりは足で稼ぐんだって、この間アンタが言ったんでしょーが、ホラ、さっさと行ってらっしゃい」

璃央が名残惜しそうにとぼとぼと店を出ていったのを確認してから、七海は店先の硝子扉をピタリと閉めた。

「さて、これでいい？」

「はい、お気遣い感謝致しますわ。ではデータはこちらに」

そういつて港区女子が胸元のポケットから取り出したのは、もはや使用頻度が激減して久しい、Type-AのUSBメモリだ。

「おっと、また懐かしいものを……」

「あいにくスマデバ⁽⁵⁾は契約が切れておりまして」

「ええ、大丈夫です。六文銭はレトロなデジタルデータ全般も取り扱いますから。VHSでもフロッピーディスクでもどんどこいです」

「まあ、ふふ、頼もしいですね」

VHSがギリギリ通じる世代で七海は少し安心を覚えた。

七海は港区女子を店奥のリビングテーブルまで案内し、よろしければコーヒーを、と勧めたが、彼女はお腹が緩くなるので、と断ったため、代わりにティーパックで淹れた緑茶を差し出した。

リビングの片隅に置かれた木製のオフィスデスクには、埃をうっすらと被った中古のPCが鎮座していた。これは七海の母親がWindows 10販売終了の前に駆け込みで購入した代物だが、最近何をするにしても動作が

(5) 二〇二〇年代初頭まではスマホの略称が一般的だったが、必ずしも電話機能を備えたわけではない携帯機器の普及に伴い、スマートデバイス、通称スマデバの略称が一般的用語として置き換わった

もっさりし始めており、もはや動画を見るだけでもカクつき始めている。彼にはそろそろ天寿を全うしていただき、早々にリプレイスされることが七海から強く期待されていた。

七海は USB Type-A to Type-D の変換ハブを持ち出し、端子の上下を確認してから、持ち込みのUSBメモリとPCを接続した。しばらくするとドライブの読み込みが完了し、画面上に動画ファイルのサムネイルが三つばかり表示される。一つは結婚式の披露宴のような華やかな会場の様子、もう一つはその会場で複数人の男女がシャンパンを楽しむ様子、そして一つだけ明らかに異質な、暗い部屋に暖色の照明だけが灯る様子。彼女にとつての「価値」があると値踏みした動画は、おそらくこれを指しているのだろう。

さあ、どうぞ、と港区女子の声。

七海はお客の顔色を覗き見たが、早く査定の結果を心待ちにしているのか、それとも少し緊張しているのか、どうも目線が一点に定まっていない。何となく、既に璃央を人払いした時点で動画の内容に察しはついていた

が、そうだとしても万が一スナッフビデオとか食人動物画だとか、そういった視聴者の精神を揺るタイプの動画コンテンツだったりしたらどうしようか⁽⁶⁾という一瞬の逡巡を間に挟んだ後、サムネイルをダブルクリックして再生を開始した。

*

暗い部屋。ぼんやりと光る卓上照明が、かろうじて男女の裸体を浮かび上げる。場所はホテルの一室のようだが、おそらくこれはラブホテルだろう。

既に女はダブルベッドのシーツの上でうつ伏せとなり、臀部のみを高く突き上げ、ゆらゆらとした動作で淫靡に男を誘っている。筋肉質で細身な男の方は、棚の上に固定されているスマデバのカメラを一瞥すると、男性自身を高ぶらせ、女の誘いをいとも容易く受け入れる。

両者の肉体のシンボルが結合を迎えたその瞬間に、男は驚嘆が、女は嬌声が、それぞれ喉から溢れ出す。地球上における人類の雄共が、今までそうしてきたのと同じように、ごく自然に、至極ゆつくりと、男はただただ己

の腰だけを前に後に動かした。BGMもなく、会話もない。スプリングベッドの軋む音だけがただ淡々と響きわたり、時折女はああ……くう……など、言葉にならない喘ぎ声たちが絞り出る。

男は姿勢を前屈に切り替え、両肘と両膝で全身を支えつつ、淫棒がより深く挿さるよう、獣のごとく己の体勢を整えた。腰の動きは一突きごとに徐々に徐々にと激しさを増し、その上で手持ち無沙汰となった両手は、なんと同時に乳房をも揉みしだいていた。女はその顔を枕に埋め、もうよがり声さえも漏らすまいと、全身を固く強張らせてはいるものの、その表情がもう悦楽によって歪んでいるであろう様子は想像に難くない。その行為に敢えて名を与えるとするならば、女の秘所から快楽を掘り起こさんとする、掘削、が最も適しているだろう。

次第に男は限界が近づいたのか、腰の動きを一度緩めて立ち上がり、撮影中のスマデバを手にとって、レンズ

(6) 数年前、模擬スナッフフィルム(殺人動画)がNFT化されて市場に出回ったが、規約違反としてハードフォークによって強制的にNFTが破棄されたという事件があった。

越しに女の裸体を覗き込む。暗所であっても高解像度ゆえ、その柔肌の表面にびっしりと浮かぶ汗や、シーツに染み込んだ水たまりなどが、この場で行われている運動の激しさを物語っていた。

男が「仰向け、仰向け」と小声で呟いた。女は身体を反転し、乳頭や無修正の具などを顕にしまったものの、撮影を意識しているのか目元は右手で隠している。そのささやかな抵抗すらも、もはや女の淫奔さを際立たせるための所作でしかない。

「えーなんだよ」「いーじゃん、どーせ観賞用なんだからさ」画面下の見切れた領域で、またしても挿挿が再開される。男の囁くような軽口と、止めどない怒涛の快楽によって、プライバシー保護の意識が緩んだのか、目元が映るように少し右手を引いてしまった。

こうして動画内で初めて、トロトロに緩みきった女の淫猥な顔面が明らかとなった。

*

この瞬間、七海は動画を一時停止しスクリーンショット

トを撮影する。

「じゃ……はい、この場面を使って動画内顔認証しませんで。こちらのカメラを覗き込んでください」

「承知致しましたわ」

表面上、七海はあくまでも事務的に、普段と変わりなく、淡々とNFT化の作業を手元で進めている。

だがその実、マウスを覆う右手の平の内側に浮かんだ手汗だとか、思わず生唾を飲み込んで喉から響いた音だとか、急速に回数を増した心拍音だとか、上気したように赤くなった頬や耳だとか、彼女はそういった興奮の証拠に繋がるような何らかのサインが外見に漏れていないか、とにかく気が気でなかった。一方で、何故この淫乱な客はこれほどまでの痴態を人に見せつけながら、これも涼し気な表情を浮かべていられるのか、未だに七海には理解できていない。

実際六文銭は、こういった非商用性的コンテンツ、いわゆる「ハメ撮り」をNFT黎明期から取り扱っている老舗だ。性的コンテンツ全般のNFT発行に対し、法規制が設けられている現代であっても、法改正以前と同様

の基準に基づき、最低限の本人確認のみで民間人のハメ撮りNFTを発行できるのは、古い質屋のみに与えられた業務上の特権である。ただ公的にハメ撮り映像を蒐集しているとはいえ、本来人間には他人に性事情を知られたくないというプライバシー意識があるため、そのほとんどの発注がインターネット窓口に寄せられていた。過去に一度だけ、ある中年カップルが自分たちの愛の表現をNFT化しようと店頭まで持ち込んだ際も、結構旦那の方が恥じらいを捨てきれず、最後の段階で女房と揉めていた。その時の生ぬるい「まぐわい」に比べても、先程の生々しい生殖行為のクオリティは雲泥の差であり、その出演者と同時視聴するという異常性を差し引いたとしても、七海が今までに視聴した数百本のハメ撮りの中でも、最上級に実用性の高い商品として素直に査定せざるを得なかった。

だが七海がどうも納得いかないのは、この女の冷めきったような態度だ。

ひよっとしたらこの動画に出演している女は、眼前のワンピ女と顔面の形状が似通っているだけで、実は他人

事として冷めた目で眺めているのではないか、などとも邪推したが、顔認証の結果はその推測を否定した。だとすれば、本来年頃の乙女に標準品として備えているであろう恥じらいという感情が、どうもこの女には搭載されていないらしい。彼女の生まれながらの環境がそうさせたのか、港区女子とやらの間ではそれが常識なのか、否、あるいは異常なほどの羞恥に怯えている自分の方が異質なのではないかと、七海は悶々とした感情で次第に自身を疑い始めていた。

「あの……終わりましたわよ」

「え？」

「顔認証」

「ああ……うん、そうでしたね。ええっと、はい、確認が取れましたので、続いてNFT発行の手続きに移ります。お相手の男性の方はお知り合いですか？」

「いえ、パーティでお知り合いになった男性ですので、もう連絡先すらも……」

「その男性はNFT発行に対して、何か否定的な意思を示されたことはありませんか？」

「いえ、何も……」

「なるほど。では男性側の同意は得られているものとして、我々の質屋の方で男性側の電子委任状を発行させていただきます。リベンジポルノ対策として女性側の承認は本人であることが必須ですが、男性側の承認は委任が可能ですのぞ」

「……助かります」

「ではこちらに認証キーのパスコードを入力して署名を付与頂ければ……はい、大丈夫です。ではNFTを発行しました。本商品は再生時間が五分以内の非商用性的コンテンツで、8K高画質、内容はこちらで黒塗り処理すれば問題ないとして、ランクA+として評価させて頂きます。相場としては……二十三万円ほどの融資が妥当かと」

「まあ……随分とお値打ちですね」

「とはいえ、アダルトビデオへの出演料金と考えればだいぶ安い金額なんですよ。あとは注意点が一つ」

「何かしら？」

「性的コンテンツはその性質上、国内だけでなく国外で

も多くの人間に閲覧される可能性があります。違法アップロード動画に対しては現在NFT所有者である我々から削除申立が可能ではあるものの、今後所有権が譲渡されて正当なプラットフォーム上で動画が公開された場合は一切手出しができません。その場合は……」

「ああ、つまりは一生ネットのおもちゃってことかしらね。構いませんわ」

「いいんですか？」

「私、もう失うものは何もないから」

たかが自分のハメ撮りをインターネット上へと放流するだけだというのに、その台詞には、本当に喪失を経験した者にしか口にできない重みがあった。

*

「七海、いるか？ すまん、起きてくれ！ 七海！」

明くる日。璃央が六文銭のシャッターを叩いたのは、まだ鳩時計すらも開閉の準備ができていない朝六時だった。シャッター脇の出入り口から、至極眠そうな目を擦りつつ、七海は寝間着のままひょっこりと顔だけ表に出

した。

「なんすか瀬戸さん……今日は定休日なんだけど……」

「やあ、これは大変なことになっちゃったよ、七海。とりあえずこれを見てくれ」

「どれさ」

「昨日お前さんがポータルサイトにアップロードしたハメ撮り動画だよ。昨晚ちよつとムラつとしちまったもんで開いてみたんだが、いやさ驚いたね。昨日お店に来ていたあの子があんなにも乱れて……あ、いや、その話はどうでもいいんだ。NFT評価額を見てくれ」

「ん……？ いち、じゅう……百万超え？ え、昨日から四倍以上にも上がってるじゃない。なんで？」

「原因はその男の方だよ。ほら、テレビ番組で見たことねえか？ 巷で話題の清純派若手男性アイドルY。顔と声が似てるって、SNSで昨夜祭りになってたんだ」

「まさか……」

「手元の顔認証・声紋照合ツールで調べたが、正確度は0.99まで一致した。さて、大変なことになったぞ、こいつは大スキャンダルを巻き起こすNFTになりそうだ」

そこからは主に璃央にとって、怒涛の日々が過ぎていった。

まず第一ステップとして、璃央は渦中のNFTを取り扱うにあたり、七海を経由して印税増収の発動を港区女子に提示した。

一般に質屋で管理されているNFTについて、客は一定期間（標準は一ヶ月）以内に利子込みの借入金返済さえすれば、どんなにそのNFTの価格が急騰していたとしても返還を要求可能な権利を有する（質請け権）。

しかしせどりの立場からするとこの質請け権の存在は厄介で、利ざやを得るため早いうちにNFTを確保してきたものの、NFTの購入直後に質請けをされてしまうと大損するリスクを拭えない。一方で客側も、NFTの評価額が最高値の時点で売りさばけるのが理想的ではあるが、NFT売買は鮮度が重要なため悠長に待ち構えていると、想定していたよりも利益を生み出さない機会損失が発生してしまう。

そこでよく利用されるのが、「質請け権の喪失による印税増収権取得」、通称印税増収だ。これはその名の通

り、客側の質請け権を喪失させる代わりに、NFTの所有権移動によって得られる印税のレートを適切に上昇させるという、スマートコントラクト制御の一つだ。これにより客は任意のどのタイミングでNFTを売却したとしても、その後の所有権移動が活発化することで印税が懐に流れるため、長期的に見ると常に最大値と同じ分の儲けが得られる。

七海は港区女子さんに対し、電話越しでこのややこしい制度をなんとか説明しきること、印税増収の快諾を得ることができた。

次に第二ステップとして、件のNFTを手に入れた璃央は、あえて各所ポルノ動画配信サービスにあのハメ撮り動画を匿名でアップロードし、SNSのエロ動画紹介アカウントにその動画へのリンクを紹介させ、効率よく、そして幅広く頒布した。言う間でもなくその効果は顕面てきめんだった。SNS上ではアイドルYの女性ファンの阿鼻叫喚で溢れかえり、各所で騒動まとめサイトや本人検証動画が立ち上がり、アイドルYは活動を自粛せざるを得なくなった。その後違法アップロード動画に対してY

の所属事務所から動画削除が要求されたが、アップローダーである璃央は「動画の所有者」からの申請ではないことを理由に全て却下した。その後Yの所属事務所からNFT所有者である璃央に対して、NFT取引の示談金が内密に提示されたが、これは現在のNFT評価額には遠く及ばないものとして拒否した。

こうして璃央は焦らしに焦らしを重ねた結果、最後のステップで、ハメ撮りのNFTを公共オークションに出品した。NFTオークションは全ての参加者にNFT購入の権利があり、特に話題のNFTに対しては、気まぐれ程度に富豪が高額入札を差し込んだりもするため、どう転んでも購入者は高い出費にならざるを得ない。最終的にYの所属事務所はオークション代行エージェントを介し、ウン千万円をかけて何とか渦中のNFTを回収したそうだが、いちアイドルのスキャンダルをもみ消すために支払った金額としては、あまりにも破滅的な出費となっただろう。

その後アイドルYはテレビではめっきり音沙汰を聞かなくなったが、その腰使いが高く評価され、今ではセク

シー男優としてそこそこ活躍しているらしい。

結局この一連の騒動で一番儲けたのは瑠央であり、次は印税の入ってくる港区女子さんであり、まあまあ儲けたのが七海、そして一番割りを食ったのがYとその所属事務所、そして最大の被害者はYのファンだろう。別にこれに限った話ではないが、結局NFTは金のあるところからむしり取って貧者に再分配するだけのシステムであって、結局のところそれに関わる全員が幸せになる仕組みではなかった。

*

「あっ」

午後六時頃。家のバランス釜が故障しお風呂に入れなくなつたため、七海は近場の銭湯まで足を運ぶと、然港区女子さんに遭遇した。久々に見かけた彼女の顔は、最初に会った時に比べるとずいぶんと血色がよくなつており、目にも活力が宿っている。無地の黒Tシャツに、ベージュのショートパンツと、だるだるのサンダルという気楽な服装も、人に合わせて着せられているのではな

く、着たい服を着ているようで、七海は前よりも好感が持てた。

「どうも質屋さん、この度は大変お世話になりました。あれから生活も大分楽にさせていただきました……」

「いえいえ、こちらも商売ですから。例のアレでは儲けさせていただきましたよ。えーつと……」

そういうえば、七海はずっと彼女のことを港区女子さんと脳内では呼称していたため、名前すらも知らなかった。正確には認証キー内で登録されている姓名情報に目を通したような気もするが、仕事柄私生活に影響が出ないようにするため、七海はあえて顧客の人名は覚えないうよう努めていた。

「ああ、改めまして。私、甘崎あまざき凛々素りりすと申します」

せつかくなので七海はあのハメ撮りの経緯を聞いてみた。曰く、昔からYの所属事務所ではアイドルの性欲処理のため、定期的にそれ目的の会員制パーティが開催されておられ、港区女子として富裕層とのコネクションを紡いでいた凛々素は一度だけ招待され、成り行きなりゆきの末、あのような行為に至つたらしい。

ではあの動画は、Yが共演であることを知りながらN FT化したのかという七海の疑問に対し、凜々素はもちろんノーですよ、と答えた。だって相手の男性の立場が判明していたら、七海さんはあの場で代理委任状を発行しなかったでしょ？ という凜々素の答えは、eー質屋というビジネスのグレーゾーンが見抜かれているようで、七海は少しだけムツとした。

とはいえ凜々素は、七海が当初見た目で印象づけていたような、ハイソでお高く止まった女では決してなく、おおっぴらに猥談も嗜むタイプのも、どちらかといえばこちら側に近い人間だった。すっかり打ち解けた関係を築いた七海は、銭湯までの道中、お互いすっかりご無沙汰になってしまった性事情などをだらだらとだべりながら歩いた。もちろん璃央のセックスが下手糞な話も擦った。

道中で部活帰りらしき男子高校生の集団とすれ違ったが、その内の一人が凜々素の顔をひと目見た瞬間、何かを察し、通り過ぎてから随分ワイワイと盛り上がっていた。「えっ」「嘘でしょ」「それマジ？」などの声が後ろか

ら聞こえてくる。

「ああ、最近こういうことが増えたんです」

「こういうこと？」

「街中で、主に男性とすれ違っていると、直接声を掛けられるわけではないのですが、ああ、アイツあのハメ撮り動画の女だって囁かれたり、振り返ってマジマジと見つめられたり」

「すっかり有名人じゃない」

「困るだけですわよ。ここまで実生活に影響が出ると聞いておりましたら、迷惑料として瀬戸さんからもっともらっておけばよかったですわ」

「そりゃ違うない、今度高い酒でも奢ってもらわないと」
そのうちに銭湯まで辿り着き、じゃあここで、と別れようとした七海に向けて、凜々素はちょうど家の風呂を沸かし忘れていたので、せっかくなので裸のお付き合いでいいかがですか、と提案した。

七海はいつも通り女湯の暖簾をくぐり、料金を払い、定位置のロッカーを決めてから服を脱ぐのだが、今日は少し抵抗があった。こうして考えてみると、七海が知り

合いと風呂に入った最後の経験は高校の修学旅行だ。裸を晒すという何気ない行為の対象が見知らぬ人から知り合いへと変化するだけで、どうしてこうも自意識過剰を疑うほどまでの心理的抵抗感が生まれるのか、あまりにも久しぶりすぎたため、七海は自分でも理解できなくなっていた。最初上着や靴下を脱ぐに留まって、しばらくソワソワしていると、凛々素はショートパンツ、Tシャツ、ブラ、下着、と惚れ惚れするほどに手慣れた動きで脱ぎ始めたため、七海は思わずその様子を見入ってしまう。

「じゃ、先に入ってますからね」

そのスタイルの良い、均整のとれた凛々素の裸体を見た瞬間、七海の脳内に電流が走り、どこかでスイッチが入ったかのように、あの動画における凛々素の痴態を完全に思い出してしまっていた。

もちろん七海も頭では理解している。彼女が今この場で己の裸体を晒したのは、決してあの時と同じように快楽を貪るためではなくて、銭湯という、性差によって区別された空間において、全身を湯に沈めて隈なく清める

ためだ。ヌードモデルのデッサン中に、欲情を催す画家なんていない。だがそれでも、あの時の押し殺したような喘ぎ声が、快楽に歪んだ表情が、滴る汗が、あのNF T化した日から、何度も何度も繰り返し再生して自分を慰めたあの動画の記憶が、七海の精神を貪るかのように蘇るのだ。

「どうなさいましたか、質屋さん？」

「あ、ああ、いま行きます」

段々と口の中が乾き、視界がくらみ、全身の血液が脳と局部にスーッと流れ込むのを七海は実感する。

もし自分に逆の性別が与えられていたならば、間違いなくその生理現象が誰の目に見ても分かるよう屹立し、凛々素を含めた他の客にも気づかれていただろう。嗚呼、女でよかった……などという馬鹿げた妄想が七海の脳裏を瞬時によぎったが、そもそも性別が逆だとしたら女湯に入れていないという前提すらも七海の脳内からは失念されていた。

*

「ふーっ、いいお湯……」

「ええ、そ、そうですね……」

「……？　質屋さん、どうしてそんなに私と距離を取って、しかも視線すら合わせてくださいませんか？」

「いや、あの、これは、その……」

これ以上あなたを直視できそうにないからです、などと童貞のような答えを言いあぐねている間にも、凛々素はスッと七海のそばへと近づいた。

「何か私、避けられてませんか？」

「違う、いや、違うんです……あまりにも、というか、直視できないから……」

「はて、今日の質屋さんはよくわかりませんわね」

体育座りの姿勢のまま肩まで湯に浸かり、七海は己を見つめ直していた。

約三十年近く、自分の恋愛対象はまごうことなく男であり、今の所そういった相手はまだ見つけていないが、将来的には男性との結婚を望んでいるはずだ、と七海は確信していた。相手は璃央だが、男とセックスもした。そしてあの映像を見るたび、すなわち凛々素の痴態が脳

裏にちらつくたびに、身体が疼くような興奮を覚えるのは、自分もきつところなりたがっているだけなのだ、と自分に言い聞かせていた。だが、もしかしなくとも、その快楽に対する羨望の裏側に、あの女が取り乱して狂えるほどの快感を自分から提供したい、という歪な願望が潜んでいることを今の七海は自覚していた。

ふと七海の脳裏に浮かんだイメージは、昔実家で飼っていた飼い猫のモネがマタタビに陶酔する様だ。あの当時は、何故父がモネにマタタビを与えていたのか理解できなかったが、父はああやって、あくまでも自身の行動によってモネを悦ばせることで、自分が飼い主であるという自覚を、もつと言えば言葉は悪いが、所有欲を満たしているんじゃないだろうか。

悦びたいのではなく、悦ばせたい。七海はほんの数分前まで、人生で考慮すらもしたことのなかった性指向が、むくむくと爆発的に成長していくのを感じた。そうなれば当然、愚かにもそれを実現したいという欲求も、徐々に頭をもたげ始めた。

一旦冷静さを取り戻すため、七海は改めて凛々素に視

線を向けた。

彼女はちようど解けかけた髪の毛を、両手でもう一度まとめようとしていた。高く上げた肘の頂点から垂れ落ちた雫が、ゆつくりと二の腕、腋のくぼみを伝い、最後は乳房の局面に沿って湯船へと帰る、という大して面白いのらない水滴の動きすらも、思わず目で追ってしまう。

「ちよっと、視線がいやらしいですよ。女同士だというのに……」

ああ、その通りだ、と七海は心の中で答えた。

七海の付与したNFTはあのハメ撮りに価値を与え、それに璃央は価値を高め、その結果凛々素はいま日本で最も有名なハメ撮り動画の出演女優という高みまで上り詰めてしまった。あの動画のNFTはもう手に入らないだろうが、あんなものはコピーすればいくらでも手に入る。それよりも、この女だけは逃したくない。いくら大金を積んでも手に入らない、この女を「所有」したいという独占欲が、七海の中の新たな性欲となってぐるぐる渦巻いている。七海の顔は上気していたが、浴槽の中でそれを確認できる人間はもういない。

「凛々素さん。その……もしよろしければ、一緒に夕飯

でもいかがですか」

「あら、よろしくてよ」

「それからもし、今晚暇でしたら……」

チャンネル0

有坂

主な登場人物

- ・チサト…女性。長髪。デウス・ワンを拒否し続けている。
- ・ユリ…女性。長髪。デウス・ワンは装着しているが、チャンネル0に設定しなかった。

二〇四〇年二月十三日

株式会社コネクティカ 新製品発表会 ライブ配信

(大勢が集まっている大きな会場。前方にスクリーン。

ざわめきの中、段々と会場が暗くなり、右端に立つ女性にスポットライトが当たる)

(スクリーンに映像が映る。人間同士が議論する映像がフェードイン)

(落ち着きのある女性の声でナレーションが始まる)

人間にとって、親密になるとは難しいものです。表面的に仲良くすることは簡単ですが、仲が深まれば深まらねなくなり、相手の嫌な部分、意見や価値観の相違から逃れられなくなり、思いつき、思い込みをしよう。生まれるのは、過度な期待、羨望、失望、怒り、エトセトラ。あらゆる断絶、喧嘩、暴力、その他不和の原因はここにあるとも言ってもよいのです。

(頭を抱える人間の映像)

なぜ、私たちはこうなってしまうのでしょうか。それはもちろん、相手の心が分からないからです。だから、推測するしかありません。しかし、その推測はしばしば不正確で、結果として関係が悪化します。

(白衣を着た人間が研究をする映像)

『この流れを変えたい。平和を実現したい。最新の技術

で、人間はもつと分かり合えるはず。そう考えた私たちは、十数年にもわたる研究の末、ついに『デウス・ワン』を完成させました。

(片耳に引っかけるように機器を装着する人間たちの映像)

デウス・ワンを装着した人間同士は、最先端のテクノロジーにより、お互いの思考や心の中身を脳に直接インプットすることができます。言語、性別、人種、職業、戸籍などの壁を超えて、お互いの想いを共有することができます。もう、理解不足で争う必要はありません。デウス・ワンは半径二十五メートル内の人間と同時に心を共有可能です。大勢の集まる会議やイベントでも機能します。

もちろん、自分の中の秘密が勝手に漏れることはありません。デウス・ワンは思想の自由を尊重しており、『チャンネル』という仕組みで公開する内容を制限できません。自分の心を最大限伝える『チャンネル1』から、ポジ

ティブな心だけを伝える『チャンネル5』まで、場面に応じて自由に選択可能です。また、デウス・ワンは非侵襲式のため、いつでも着脱できます。

(地球の映像)

デウス・ワンはいくつかの機関での実証実験を終えた後、まずは国内の企業を対象に提供を開始します。その後、個人向けに販売を開始し、各種規制の問題をクリアしつつ、世界中へ展開していきます。価格は一台わずか五万円です、購入数に応じた各種割引も予定しています。

(太陽を背景にした笑顔の人々の映像)

誰もがお互いを理解しあえる、争いのない世界。誰もが望みつつ諦めていたこの理想を、弊社はデウス・ワンで実現します！

(明るくなる会場)

(沈黙)

(沈黙)

(巻き起こるブーイングと困惑の声。次々と焚かれるフ
ラッシュ)

二〇四〇年四月十九日

〇〇高等学校 二年一組

穏やかな風が、窓際の席に座る男女の間を抜けてい
く。朝の風特有のサラサラとした感覚は気持ちがいい。
春眠の心地よい気だるさを奪い過ぎないまま、人の精神
を撫でるように、爽やかに目覚めさせてくれる。窓の向
こうには麗らかな春の青空が広がっていて、集中力が切
れてきた時に眺めれば、身近な美しさに触れたとい
うほのかな喜びも感じられるのがお得だ。カッカツとい

うチョークの音が風と混じり合うのは、さながらカフェ
に流れる音楽みたいだし。だから、この時期の窓際は人
気だ。反対に、無機質で寒々しい廊下側の席は不評だっ
た。少なくとも、去年までは。

今年の光景は、言うまでもない。教室は隅から隅まで
笑顔で溢れている。窓際の席の子も廊下側の席の子も、
男女問わず同じように微笑んでいた。クラスのほぼ全員
が風の歌を聴き、春の訪れを喜び、太陽の温もりを感じ
ながら、授業の内容を漏らさず理解している。経験と幸
福を共有する完璧な集団、大家族とでも呼ぶべき完成さ
れた共同体が、ここにはある。

【暖かい 風が涼しいね 綺麗な空 青春じゃん 平和
だし 眠いわ 幸せ 授業つら 物理面白い タコマ橋
知ってた 振動だっけ 共振って説は誤り 教科書のこ
この説明が超いい なるほどね 分かりやすい あり
ごと】

クラスメイトのほ、ぼ、全員の思考と感覚が常に共有され
ている状況は、思っていたよりも随分と心地よかった。
私が授業を聞いていなくても、誰かが代わりに聞いてく

れば勝手に頭に入ってくる。特に頭がいい人の思考はともよく整理されているので、みんな重宝していた。

その間、私たちのような凡人は思い思いの時間を過ごす。一見真面目に授業を受けている人が馬鹿を見そうだけれど、実はそうじゃない。不真面目な人が漫画を読んだり、昨日見た映画のことを思い返したり、別の教科の勉強をしたりすれば、全員にそれが還元されるから。

それでも、たゆたう思考の波に乗りながらポーッと過ごす私は、きつとみんなのお荷物だと思う。しかもチャネル3なのは私だけだ。タダ乗りだと批判されてもおかしくないけれど、みんなは私に目くじらを立てるほど暇ではなかったし、それに――。

窓際の一番外ろ、いわゆる主人公の席に目をやる。陽光で明るく光る白色の制服を着て、長い髪の毛を風に任せ、袖をめくり、つまらなそうに頬杖をつけて外を眺めている彼女がいた。教室に満ちる幸福から疎外されているのは、一組四十人のうち、彼女一人だけだ。

そのまま何気なく見つめていると、彼女がこちらに気づいた。キッと目が細くなつて、むき出しの敵意がぶつ

けられる。私は慌てて黒板に目を戻した。

【どうしたの　またチサト　大丈夫？　なんであんな顔するの　しょうがないよ　かわいそう　でも選択だし仕方ない　集中しよう】

私が感じた不安や恐怖は瞬く間にクラスに共有され、心配され、思考され、結論が出る。たった数秒で不安は打ち消され、元の多幸福感がやってきた。私はホッと胸を撫でおろす。不快な感情が消えたことよりも、こんな私をみんなが家族だとまだ認めてくれていたことに安心した。もちろん、私もみんなと同じチャネルに設定すれば何も心配することなく家族を演じられることくらい分かっている。やろうと思えば今からでもすぐに。でも、それは何か嫌だった。論理じゃない、感情的なモヤモヤが胸につっかかって、どうにも踏み出せない。というか、踏み出したくないのかもしれない。

【ユリもチャネル変えなよ　めっちゃいいよ　強制はしないけど　もったいないって】

数人が私にチャネルの変更を勧めてきた。斜め前に座っているサトミが、すかさず私の方へ振り返る。彼女

の顔には不気味なほど綺麗な笑みが浮かんでいた。私はブンブンと頭を振って意思を示す。ダメ、まだ心の準備ができてないの。

【そっかあ　しょうがないね　集中しよ　そだね】

サトミが前を向いてホッとしたのも束の間、今度は教卓の前に立つカミヤマと私の目が合った。どきり、とする。カミヤマは馬鹿みたいに授業熱心な物理教師で、一年の頃はことあるごとに私たちを叱っていたからだ。だけど、予想に反してカミヤマは私やサトミを咎めなかった。彼は露骨に怪訝な顔をしたものの、そのまま黙って身を翻すと、再び板書を再開する。たった二か月前まで細かなことにまでガミガミしていた人間が、たった二週間で態度を変えるなんて思わなかった。今まで怒られてたのはなんだったんだろう。

私は、右耳の上にある機器、カミヤマの態度を豹変させた原因であろうものにそっと触れる。表面のゴム越しに、デウス・ワンの発するほんのわずかな熱を感じた。ああ、もう、このまま押し潰してしまいたい。一方で、これを失うことは怖い。デウス・ワンは、私と一組を繋

ぐ最後の架け橋だ。だからこそ、このほのかな温もりが憎らしい。……このモヤモヤを一組に共有したら、みんなはどういう反応をするのが気になる。でも、こんなマイナスすぎる感情はチャネル3では公開されない。したくない。よって私だけの秘密だ、今のところは。

おぞおぞともう一度、主人、公席の方を見てみる。彼女はまた窓の外を眺めていた。彼女の右耳の上には何も引っ付いていない。機器の不在を意に介さずにいられる彼女の姿が、私には羨ましく思えてならなかった。

*

きっかけは、つい二週間前のこと。人と人との心や思考を共有する革命的な機器『デウス・ワン』が、教育現場での実証実験の一環として、私たち二年一組に配布された。機器を受け取った時のことはよく覚えている。朝のホームルーム後の教室で、小さなクリーム色の箱に入られた親指大の白い機械と設定用の小型端末、容器に入れられた透明なジェルが全員に配られた。そして、教卓の前に立ったのは二人。営業スマイルを振りまく担任

と、その横で頬を紅潮させながらデウス・ワンの必要性を熱く語るおじさん。このおじさんこそがデウス・ワンの研究開発のリーダーで、確かカシワギという人だった。カシワギさんは十数分にもわたって、研究開発の経緯や技術的困難の解決、そして大勢の反発に対して万全の対応策をとった旨を説明した。要約すると、デウス・ワンは世界平和のために欠かせないもので、その安全性には相当の自信があるとのことだ。

それでも一組生徒からの反応は芳しくなくて、私もその中の一人だった。見返りも少ない状態で実験対象になることに對する不満もあったけど、一番の理由はデウス・ワンに對する世論のせいだろうと思う。二月の発表以降、ニュースでも度々デウス・ワンは取り上げられ、酷評されていたから。『管理社会を強化する』『人間性を失う』『新たな格差を生み出す』など、著名人や権威が次々とデウス・ワンに懸念を示して、みんな気にしていた。一組だって例外じゃない。だから、一人が手を挙げてカシワギさんに質問した。

「すみません、これは強制ですか」

「いえ、装着するかは皆さん一人一人にお任せしますし、着脱も自由です。ですが、私は研究を率いてきた一人として、デウス・ワンに確かな自信があります。装着すれば必ず、授業やコミュニケーションに役立つでしょう。後悔はさせませんよ。一組みんなが幸せになれるはずです」

それを聞いて、一組はみんな黙ってしまった。

結局、初日にデウス・ワンを装着したのは十人。しかも、世間の反発に對する『万全の対応策』として、配られたデウス・ワンには大きな機能制限があつて——心や思考の共有が大幅に制限される『チャネル3』に固定されていた。チャネル3では、装着した人同士でもあくまで表面的な心や思考しか共有されない。結果として「期待したほどじゃなかった」と、その日のうちに二人が外した。次の日にはさらに三人が外して、仲の良い男子五人組だけが残った。五人も真面目というより興味本位というか遊び半分で着けているようなもので、しょっちゅう着脱を繰り返していた。一組での実証実験は失敗だったねと、みんな思っていた。

事態が大きく変わったのは、四日後の朝。男子五人が授業中の暇潰しでデウス・ワンの設定をいじっている、一人が偶然にもデバッグモードを発見してしまったのだ。とはいえ、デバッグモードで変更できる設定項目のほとんどは一般人に理解できない。それでも『チャンネル0の有効化』という項目だけは全員が意味を理解できた。項目の下に、簡潔な説明があったから。

『全ての思考と心情を周囲と共有する（実験用機器のみ利用可）』

五人組は、ゲームの裏技を見つけたかのようにしゃいでいた。けれども貧乏くじは誰だつて引きたくないのか、昼休憩になっても五人は騒ぐばかりで一向に進展しない。結局、その日の帰り際に一人が悪ノリをしぶしぶ引き受けて、一瞬だけチャンネル0を有効にした。

有効になったのは、たった数秒間のことだったと思う。私は友達と一緒に帰り支度をしていたところだった。五人がまた馬鹿やつてるよと、一組のほとんども五人を気にもしていなかった。けれども、その数秒間の後。突然、五人は肩を組んで一斉に大泣きを始めたの

だ。私も、周りの人間もぎよっとした。

「ホンマごめん！」

「俺たちが無神経だった！ 悪かった！」

「いや、分かってくれたならそれでいいよ、ありがとう……ありがとう」

悪ノリを押し付けられた一人の心情と思考が五人全員に共有されて、自分たちの浅はかさに気が付いた四人は泣いて悔やんだ。言葉では伝わらない、微妙な思いやすれ違い。デウス・ワンはチャンネル0を通じてそれを共有し、五人を見事に一つにしてみせた。

「俺もこれからチャンネル0使うわ」

「正直怖かったけど、こんなに効果あるなら使ってもいいよな」

心底感動したのか、そう呟いて五人は次々にチャンネル0を有効にしてみせた。五人の顔はすぐに、見たこともないくらい明るい笑みで満たされて、

「ホントに凄いやこれ。みんなも使ってみて欲しい。グルチャでやり方教えるわ」

教室中がざわめく。騒ぎをよそに、晴れやかな五人は

自分たちの得た知見をすぐに一組のグループチャットに投稿した。手順は手間こそあったがさほど複雑ではなく、「そんなにいいなら一瞬試してみない?」「でもちよつとヤバそう」「数日様子見して良さそうならやってみればいいじゃん」などと、波紋は徐々に広がっていく。

月曜日には、土日に試した冒険好きな人と、その体験談に興味を持った人がデウス・ワンを装着し、チャンネル0を有効にした。チャンネル0は決して心を繋ぐだけではなかった。授業でも、チャンネル0の彼ら彼女らは内容の理解も完璧だった。小テストは一般生徒よりも早く正確に解き、先生に当てられれば120%の完璧な回答を返す。何せ、複数人の脳が一つになったも同然。普通の人間が勝てるわけない。勉強に真面目で実証実験に興味がなかった人たちも、この結果を見てか、とりあえず機器を装着した。そうすると、周りのチャンネル0の人の心を吸収するうち、いつの間にか自分たちもチャンネル0への仲間入りを果たしてしまう。きつと感化されたのだろう。そして何より、チャンネル0の人たちは楽しそうだった。

た。常に笑顔で仲良く成績優秀。一組は学校中の注目的になり、最高の機器があるのにわざわざ装着しない一組生徒はむしろ不思議がられた。結果として、機器の配布の翌週末には、私とチサト以外の全員がチャンネル0になっていった。

『装着すれば必ず、授業やコミュニケーションに役立つでしょう。後悔はさせませんよ。一組みんなが幸せになれるはずです』

結果論ではあるものの、カシワギさんの発言は恐ろしいほど正確だ。チャンネル0はウイルスのように一組に蔓延し、一人一人が自由に生きて、全員でその利益を享受できる疑似的大家族が形成されていく。個々が輝き、一つに混じりあう。弱みを補い、強みを育てる。対立も押し付けもない、集団の完成形。

素敵な話だ。全てをさらけ出して認め合えば、何もかも乗り越えられるのかもしれない。言葉には裏があるけど、チャンネル0には表も裏もない。相手の全てを受け入れて、自分の全てを与える。まさに美しい世界! これ以上の幸せなんてない。

——本当に？

私はチャネル〇へ参加していない。理由は……自分を全部共有するというのが、怖くて。とはいえ、デウス・ワンは妥協して装着した。一組でやっていくためには、もはや選ばざるをえなかったから……じゃない、これはカッコいいだけの言い訳。実際、選ぶことはできた。私が弱かったせい。だって、チサトは最初から最後まで装着すらしなかったから。もちろん一組で上手くやれているわけではないけど、それでも彼女は、ずっと人間のままでいようとしているんだと思う。それはそれでいいこと。私とチサトは違うし、私と一組も違う。違うことは恐れることじゃない。だから、大丈夫。

こう結論を出してから数日が経つけど、どこか納得できない感情は消えていない。溶け残った不快な気分の塊が、チラチラと胸のあたりで燃え続けている。一組もチサトも間違っていて、かつ両方が正しい。みんな違って、みんないい。

——本当に？

苦しんでいるのは、どうせきつと私くらいだ。どっち

つがずで優柔不断な私が全部悪い。でも、私の幸せは周りのそれよりもずっとずっと複雑なんだよって、勇ましく叫べたらどれだけ楽になれるだろう。いつそチャネル〇で認めてもらおうか、なんて思ったりして……本当にしようもない。周りが明るくなっているのに、私はどんどん暗くなっていく気がする。

*

昼食の時間になって、一組の教室はがらんとした。残ったのは私だけ。チャネル〇の人たちは本当に仲が良くて、一緒にご飯を食べに行ったのだ。チサトはいつの間にかいなくなっていた。ポーツと広げっぱなしにしていた教科書を鞆に戻して、おもむろに立ち上がると、窓の外を覗きにいつてみる。中庭には一組の生徒が集まっでいて、パンや弁当を手にながら草むらやベンチに座ってまったりと過ごしていた。人数の割に声は全く聞こえてこない。それでも、一組の人たちの思考や感情は常に脳へと届き続けている。それはそう、心が共有されれば言葉なんて不要なんだから。私は大きいため息

をつく。あと二週間で実験は終わりだ。だから早く、早くその時が来てほしい。そうすれば、私は何も考えなくて済む。多分。

ガラガラ、と背後で教室のドアが開く音がする。振り返ると、購買でパンを買ってきたらしいチサトがそこにいた。二人きりの状況にうわっ、と思ってしまう。顔に出ないといいけど。チサトは無表情で私を一瞥すると、彼女の席に腰を下ろした。背後でペリペリとパンの包装を破る音。私は視線のやり場に困って、誰も視界に入らないように教室の中心を見つめることにした。

「……………」

チサトは右後ろで黙々とパンを食べている。一分、二分と時間が過ぎる。廊下を他クラスの男子が通ったが、一瞬ちらつとこっちを見ると足早に去っていった。きつと隣れまれてるか、面白がられてるんだろな。

「ねえ」

思わずビクッとする。声がしたのは後ろ……チサトに間違いない。また怒られるのか。

「い、ごめん」

慌てて後ろを向き、すぐに謝罪する。怖くてチサトの顔は到底見られないので、見えるのは机とチサトの手足だけ。だらしなく開けられた袖、メロンパンの袋を掴む手、黒色のソックスに濃い緑色のスリッパ。足元は意外と綺麗にしているらしい。しばらくの後、はあ、と小さなため息が聞こえて、

「そんな嫌なの？ 私が」

怒りというより、寂しげなトーンでチサトが呟く。てっきり怒られるとばかり思っていた私は、その弱々しい声を聞いてさらに慌てた。顔を上げると、チサトはやっぱり怒った表情ではなくて、むしろ疲れた顔をしていた。

「いやだって、さっきも私を睨んでた」

「それはそっちが先だし、誰だっていきなり見つめられたら嫌でしょ。私は見世物じゃないの、デウス・ワン組からしたら違うかもしれないけどさ」

チサトはぶっきらぼうに言う。ああ、私もみんなと同じだと思われてるんだ。

「私はチャンネル0じゃない。他の人とは違う」

「それはすごい。みんなと違うって言ったの、あなたで三人目だけど」

今度はわざとらしく嘆息を漏らしてから、チサトは目を細めて私に問いかけてきた。

「……あなたの名前、ユリさんだったよね」

「そうだけど」

「外してみてよ、耳のそれ。みんなと違うならできるとしよ」

チサトは大げさに、人差し指で右耳の上をコンコンと叩く素振りをする。

「やっつてよ、ユリ」

「そんなの、もちろん」

馬鹿にしないで、と内心苛々しながら、私は右手の指を耳の上の装置にかける。そして、指先に力を込めて

【やめなよ 脅しに屈する必要ない 私たちがいるよ！

チサトどうして そんなの無視無視！ あの子にも事情あるんできしよ】

心臓が高鳴る。ハツとして窓の外を見ると、一組全員

の顔がこちらを向いていた。

【ユリも外でご飯食べよ 安心して 外したら悲しい こっちは楽しいよ 幸せになろうよ】

表情は読めないけど、私を氣遣う心が十二分に伝わってきた。チサトに構う必要なんかない、こっちにおいて、と脳内に心が木霊する。暖かい、柔らかい、包まれるような安心感がじんわりと心に広がっていく。離れていても、私の不安がみんなに伝わっているんだ。チャネル3でほんのわずかな部分しか共有してないのに、理解して私を受け入れようとしてくれてるんだ。

なのに私は、どうしてこんなにもチャネル0が嫌なんだろう。

「……………」

私は黙って右手を降ろした。歓迎するように、窓からふわりと風が吹きこんでくる。涼しくて心地よい、新しい春風が。

「ほらね、できないんじゃない」

長い髪をなびかせながら、チサトは私を鼻で笑った。そのまま、包みから取り出したメロンパンを潰すように

引きちぎって、

「『私は違う』はもうたくさん。みんな同じだよ、私みせもの以外はね」

彼女は眉間に皺を寄せながら、平たくなった欠片を口に放り込んだ。

二〇四〇年四月二十日

〇〇高等学校 廊下

「ねえ、聞いた？ 二年一組の話」

「聞いた聞いた！ 新しい機械の実証実験してたら、隠し機能を見つけてオンにしちゃったんでしょ？」

「ヤバイよね！ どんだけ勇氣あるんだって話」

「それ、マジでウケる。私じゃ絶対真似できない」

「いや、それがさ、最初にオンにした人以外はそもそも機械に興味なかったらしいんだけど、成績とか仲の良さを見て試しに着けてみたら、それがめっちゃ流行っちゃったんだって」

「え、それじゃウチらも着けたらそうなるのかな？」

「こっわ」

「でもさあ、正直、正直な話よ、成績めっちゃ上がって周りとか良くなって楽しく過ごせるならさ、ちよっと試してみたくない？」

「えー、ヤバイ葉みたいじゃん」

「って言っても、いつでも外せて、ピアスみたいな跡も残らないなら一回くらいやってみたいでしょ。副作用もないらしいし」

「まあ確かに……テスト前だけ着けてみたいかも。勉強しなくてもいいんでしょ？」

「しかも授業とかも受けなくていいらしいよ。得意な人が授業受けて、他の人たちは漫画とか読んでるって言うた」

「え、どういうこと？」

「よく分からないんだけど、脳が共有されるから、勉強と遊びを同時に行えるんだって」

「何それ最高じゃん、えー、いいなー二年一組」

「羨ましいよね」

*

「一組のカナ、最近めっちゃ明るくなったよね？」

「分かる！ 私も今日笑顔で挨拶されたわ。あ、もしかしてアレも機械のせいなん？」

「らしいよ」

「ヤバすぎでしょ」

「マジでそれだよね！ だってカナって一年の頃さ、ぶっちゃけ微妙にいじめられてたっぽかったじゃん」

「そうそう、しかもいじめてたサトミとまた一緒のクラスになってね」

「ね、あんまひどくなるようだったらチクろうかとも思ってたけど、例の機械がきてすぐに変わったことない？」

「まああんまり会ってなかったけど、多分そうだと思う。先週の体育の時は暗かったけど、今日の体育マジで明るかったし、一組同士がありえないくらい仲良かった」

「え、じゃあサトミは？」

「カナと一緒にバレーやってたけど、二人とも楽しそう

だったわ」

「それってつまり、あの機械のおかげで仲良くなったってことでしょ？」

「としか思えない。心を共有？するから、お互いに深くまで理解できるって話じゃん」

「あー、だからカナとサトミの心が混ざって、いじめがなくなったんだ」

「ヤバ、めっちゃいい話よね」

「いやホントにヤバイよ。あの機械、テレビだといったも悪く言われてるけど、今のところデメリットくない？」

「でも自分の秘密とか漏れるんでしょ？」

「お互いの心も共有されるから、悪用されるケースは稀って聞いたけどね。イメージとしては家族に打ち明けるのと同じらしいし」

「あー、なるほどね。ガチで仲良くなれるから問題にならないって感じ？」

「そうらしいよ」

「なら私も……ってというか、二人でやってみよう」

「え？ あ、私と一緒にってこと？」

「そうそう、万が一があっても信用できるし」

「それは照れるわ」

「私たちはズツ友だからね」

二〇四〇年四月二十日 放課後

〇〇高等学校前 交差点

「なあ、この後カラオケ行かかね？ どうせ暇っしょ？」

「いいね！ ジュンは？」

「あー……わりい、今日用事があるわ」

「またかよ？ 最近お前付き合ひ悪い悪すぎだわ」

「彼女でもできたんじゃないやね？ え、まさかデート？」

「マジ!？」

「違うって」

「じゃあなんだよ」

「いや、理由はあんま言いたくないんだけど」

「それ絶対ヤバイやつやん、めっちゃ気になるわ」

「言えって、おい」

「あー、だから、恥ずかしいんだって」

「何がだよ」

「……だからさ、親が寝込んでるから看病すんの」

「はあ？ そんなんなら最初っから言えよ」

「え、じゃあ最近来なかつたのもそれなん？」

「まあ、調子悪いから」

「変なところで恥ずかしがんなって」

「だってお前、俺がこういうこと言うときサトシとかに言

いふらすだろ」

「んなこと言わねーよ！ どんだけ信用ないんだよ俺」

*

【じゃ、また明日ね】

【……ねえ、もうちよつとだけ。駅前のカフェに二人で行きたい】

【ごめん、今週は家で晩御飯を作る当番なの。お母さん、最近帰ってこなくてさ】

【あ、なるほど】

【また今度行こう】

【うん、頑張れ。必要なら私も手伝うよ】

【ありがとう】

*

意味もなく交差点の電柱に寄りかかって、去っていく人たちを眺めた。

声を出して会話する人と、声を出さずに心を共有する人。昔ながらの交流、眺めていてホッとするのは前者だ。でも、後者は間違いなく効率的だし、前者にはない大きな信頼があつて……というか、根本的に信じる必要がトートロジーな関係になる関係。今まで世界に存在しなかった最新の関係。

——最新、更新、ニューバージョン——

あーあ、私は何してるんだらう。考えるのが億劫になつて、逃げるように真上を向く。橙色と紫色が混じり合つた空間を、電線の黒色が二つに割いている。電話やテレビやインターネットが出た時も、みんなこんな風に

空を見上げたんだらうと思う。そして結論はこうなつたに違いない。「空はこんなに大きくて自由なのに、どうしてくだらないことで悩んでるのか」と。

でも、同時に私はこうも思う。小中学生の頃、今から思えばしょうもないことで悩んで泣いたこともあつた。でも、当時はそれが本当に重要だつたし、結果として自分にとって意義あることだつたんだと。つまり……私は、まだ子供なのかな。だとしたら、大人ってなんだらう。全てを受け入れて、過去にすることが大人になる条件なら、私は一体、何のために生きてるんだらう。

二〇四〇年四月二十三日

〇〇高等学校 職員室

「教頭先生、例の機械……デウス・ワンについてなんですか」

「チャネル0の件ですか？」

「そうです！ あの話、学校中に出回ってますよ。問題

になりませんか？」

「いえ、むしろ保護者の方から凄く評判がいいんですよ」

「はあ？」

「さっきも一組の親の方から電話が来てましてね、学校に行きたくないって泣いてた息子がはつらつになつて本当に感謝してます、つて」

「でもあれ、正式な機能じゃないんですよ？」

「確かに正式ではないみたいですけど、安全だと分かっている機能だから問題はないつて、代表の方から説明を受けてます。別の実証研究に使う機能だったと」

「じゃあ、なんですか。大事にはしないし、ならないつてことでもいいんですね？」

「先週向こうと話したところ、むしろマスコミを入れて取材できないかつて言われてるくらいで」

「ええ？　いくらなんでもいきなりじゃ」

「残り一週間しかありませんから。一組のみんなが仲良くなつて、成績も上がつて、保護者の方からも感謝されている。デウス・ワンのおかげですよ。取材を受ければ、こちらと向こうの顔が両方立ちます」

「確かに、一組には文句のつけようがないですが……取材はいつ？」

「明日の朝、二限目に少しだけ入れようと思つてます。

授業の進行ペースも見ましたが、問題ないでしょう」

「校長先生は？」

「それでいいと仰つてます」

「そうですか……」

「心配ですか？」

「ええ、ちょっと。確かに一組の子たちの変わりようを見てみると、デウス・ワンを信じたくなる気持ちもあるんですが」

「時代は変わりゆくものですから、先生」

「そうなんですかね。私が古いだけかな」

「現に若い子たちが生き生きと輝いているんですから。研究者の方も万全を期すと約束してくださいませすし、大人は見守るのが役目だと思いませんか？」

「……分かりました。信じてみます」

「そうしましょう。とはいえ、何かあればすぐに仰つてください」

「もちろんです……ん？ ああ、ユリさんか。ごめん。すぐにプリントを持ってくるから」

二〇四〇年四月二十五日

ワイドショー

「……ここまで、高校の取材VTRを見ていただきましたが、タカヤマさん、あらためてデウス・ワンについてどう思われますか？」

「そうねえ、これ見るまでは正直、デウス・ワンなんかとんでもない機器だなと思ってね。ほら、世間では脳を乗っ取られるとまで騒がれたじゃない。だから、率直に言っただけだけれども」

「ええ」

「でも、二年一組を見てさ、自分がホントに浅はかだったなと反省したよ。成績が上がったとかは正直まあいいんだけど、VTRにもあった通り、一組みんなが心の底から分かりあえて仲良くなってる、あんなに明るくなった

なんてね」

「確かに、すごく楽しそうにしてみましたもんね」

「しかも一番良かったのは、いじめにならなかってた子たちがお互いの心を共有して、大親友になったところ。普通さ、いじめって周りが押さえつけたり監視したりして無くすものよ。それが、お互いを理解することで自発的に無くしてしまった。もうこれ、世界平和ですよ」

「デウス・ワンのおかげで、本当に世界平和が達成できそうだと？」

「そうだよ、可能性というか現実として例が出てきたわけ。もちろん今後は半径とか対象とかをもっと調整できるようにしていくんだろうけど、これは凄いよ」

「なるほど。では、サトヤマさんはいかがでしたか？」

「……何というか、ホント、古い大人ってダメだって」「というの？」

「新しい技術とか価値観が出てきたらさ、すぐ否定しちゃうじゃない。今回のデウス・ワンもそう。怖いからって拒否しちゃって、あやうく世の中がデウス・ワン

を潰すところだったわけでしょ。世論に負けて開発やめちゃってたら、一組は仲良くなれなかったし、いじめだって問題になってたかもしれない。成績もすごいよね」

「授業内容の理解やその他の学習効果も急激に向上した、と発表されています」

「みんなの脳を集合知的に使えるから、当然成績もよくなるってことでしょ。誰でも天才になれるってわけだ。はあ、ホント、自分のアップデートは大事だね。若い人の邪魔をしちゃいけない」

「一方で、一部からは個々人の思想の自由を侵害しかねないと指摘されているようですが、こちらについては？」

「そんなこと言ったらいつまでも変わらないじゃない。しかも、デウス・ワンの装着は任意なわけで。強制的に身に付けろって言うんだったらともかく、選ぶ自由があるなら別にいいでしょ。この結果を見ても分からないような頭の固い老いばれは着けなきゃいい」

「サトヤマさん、その発言は……」

「ああ申し訳ない、ついつい熱が入っちゃってね。今の

はちょっと言い過ぎか、ハハッ」

二〇四〇年四月二十六日

〇〇高等学校 二年一組

甘かった、と私は思う。ずっとそのまままでいてくれると思ひ込んでいた。これ以上は進歩しないと。これが限界だと。生半可な私が関わり続けられると、思い込んでいた。

【幸せ】授業遅【早くして】すぎ【って】大好きな子が

【金曜日【一組最高】の夜】微分は【方程式】このま

【明日】昨日【ま】

【なんで【いや、漫画だ【不等式】と】ここ【試験結果】

が【予後不良】【次の授【誰か取っという】業って】分からない【

脳内に次々と、とんでもない速度で思考が流れ込んでくる。一個一個を捉えようとしても全く間に合わない。

関心を持った次の瞬間には別の思考が入ってきて、同時

にいくつもの思考が脳へ叩き込まれる。周りを見回す。みんな固まった笑顔のまま、表情を一切動かさない。だってそうだ、もはや表情なんて必要ないんだ。チャンネル0は自分自身全てを共有できる。文字も、言葉も、表情も、きつと肉体だつて必要ない。チャンネル0に参加した人たちは、共有する情報の密度をどんどん上げていった。無駄なく、全てが共有されている前提で、最高の効率で情報の交換を行う。私のように一部の情報しか提供できないチャンネル3では、0の速度と仕組みについていけない。きつと、無駄が多すぎるのだと思う。

黒板のチョーク音が耳に刺さる。先生の声が脳にキンキンと響く。ヤバイ。このままじゃ、私が壊れる。頭を抱えて目を瞑る。大丈夫、きつと何とかなる。実証実験もあと二日。あと二日で終わりなんだ。

……いや、それで済むわけではない。こんなにも社会に認められてしまった以上、すぐにではなくても、数か月後にまた再開されるかもしれない。そうじゃなくても、大学生、社会人になったら、周りがこれをみんな着けるようになるかもしれない。私が認めない限り、この小さな

機械が永遠に私の未来を押し潰し続ける。不安と恐怖に支配されて毎日を生きるのは嫌だ。

でも、一組のみんなは幸せに生きている。それを壊すのも違う。だって、一組は悪くない。誰も悪くない。だから、苦しい。今にも息が止まりそうなほどに。

【ユリ、大丈夫？】

目を開けると、小さな手が目の前をひらひらと泳いでいる。可愛らしい手の主をたどると、隣の席のカナが心配そうにこちらを覗き込んでいた。

【どうしてカナは私と話せるの？ 私、チャンネル3で遅いのに】

【さすがに隣の席だからね。ユリが露骨に体調悪そうだったから、一旦チャンネル3にしたんだよ。保健室行く？】

【いや、大丈夫。平気】

カナが小さく微笑むと、彼女の短い前髪が揺れた。一組に入ってすぐの頃は、カナの表情は今の私よりもずっと沈んでいたのを覚えている。話しかけても二、三の単語が返ってくるだけで、会話は全く続かなかった。それ

が今やこんな頼もしく思えるなんて、一組に入って本当に強くなったんだ。

ならきつと、カナなら——。

【じゃ、戻るね。ユリも早くチャンネル0にした方がいいよ】

ふふ。そうだね、あはは。

……………。

上手く笑えただろうか。でも、気にする必要なんかない。私が精一杯の笑顔を作り終える前に、カナは前を向いてしまったから。今更悲しくもなかった。

ああ、速度が上がっていく。一組がアップデートされていく。全てが変わっていく、最新の幸せに対応したものと。人と人を統合する夢の世界へと。

私も変わらなきゃいけないのかな。だって、周りほとんど進歩していく。もしかすると、もう追いつけないのかもしれない。でも、でも、納得いかない。どうして？ 私が何をしたっていうの。ただ私は、自分を保って生きたいだけなのに。他人に自分をさらけ出さなきゃいけないことって、そんなに簡単なことなの？

理屈は分かる。相互理解があれば怖くない。一つになれば怖くない。幸せ。平和。分かる。分かるけど。

*

「えーつと……ユリさん、大丈夫？ 随分と顔色が悪そうだけど」

今度は新任の数学教師が声をかけてくる。気が付けば、クラス中の顔がこちらを向いていた。みんな笑顔のはずなのに、その顔に、圧力を感じる。邪魔をするなど言わんばかりの力が。ヒッ、と声が出た。やだ、違う。私は、ただ、悩んでいただけで。

「もし、具合が悪いのがデウス・ワンのせいなら、すぐに外した方がいい」

「それは、無理です」

「……なあ、みんな、ユリさんと繋がってるんでしょ？ 本当に彼女は大丈夫なの？」

困った顔をして、先生は近くの席の子にそう尋ねた。余計なことをしないでほしい。けど、新任だからそう責めるのもかわいそうで。

「ユリはチャンネル3なので、深くまでは分からないんです。デウス・ワンを怖がっているのは分かるんですけど」

数秒の間があつて、先頭の子が答えた。久々に聞く声だった。

「あれ、そうだったのか。てつきり、みんなチャンネル0なのかと……ユリさん、保健室に行かない？」

「い、いえ、大丈夫ですから」

「そんな真っ青な顔で言われたって困るよ。何かあつたら先生の責任にもなるんだ、勘弁して」

保健室に戻つたら、みんなとの接続が切れる。そうなつたら、今度こそ戻れない気がする。怖い。それはチャンネル0と同じくらいに、怖い。

「……………」

「じゃあ、ユリさん、一瞬だけでいいから、チャンネル0に参加してみない？ そうしたら、みんなが理解できるでしょ？」

「嫌です」

「周りに何かされたの？」

「いえ」

「ならどうして」

「そんなの」

「え？」

「そんなの、個人の自由じゃないですか！」

我慢できなくなつて——いや、耐えきれなくなつて——気づけば、私は教室で一人、過去一番くらいの力で怒鳴つていた。先生に向かつてではない。一組に対してでもない。これは自分に対する怒りだ。不甲斐ない自分自身に対する憎しみだ。

もともと静かだった教室が、一層無音に近づく。鼓膜がピリピリとして、吐き気がした。叫んだせいか、心に張つていた糸が弛んで、何も考えられなくなる。もうどうでもいい。いっそ、窓から飛び降りてやろうか。私が苦しいのは、苦しいのは……

「やっぱりか」

顔を上げる。先生が妙に納得していたような表情でウンウンと何度も頷いていた。そして、半ば興奮したような口ぶりで矢継ぎ早に言葉を繰り出してきた。

「そうだ、そうだよな！ 最初からそんな気はしてたんだ！ こんなうまくいくものか、って疑問だったんだけど、やっぱりそうじゃないか」

「……どういふことですか」

「チャンネル0を選択するという行為が、半ば強制力を持ってしまふってこと。つまりは、チャンネル0・ハラスメント。違う？」

「それは……」

「上手く適合できる人もいれば、できない人もいる。きつと多くの人は適合できるだろうね。だけど、ユリさんや……その、チサトさんは、違ったわけだ」

いきなり説教が始まって、私は混乱した。チサトの方を見てみると、彼女も同じく顔に困惑を浮かべている。この流れは、彼女が求めているものでもないようだ。でも、そのことに先生は気づかない。彼の中で、ピースがパチリとはまって気持ちがいいのだろう。先生は持論を続ける。

「これじゃ、本当の意味で幸せにならない。一部だけが幸せになって、残りが取り残されるんじゃない不公平だ。優

性思想ってやつだね。まったく、子供をこんな思想で染め上げようとするなんて、酷い話だよ。そう思うでしょ？」

「先生」

「ユリさん、チサトさん。このままじゃだめだ。一緒に教頭先生へ直訴しに行こう。デウス・ワンを止めよう」
先生はチョークを置いて、私の方へと近づいてきた。少しずつ、一歩、また一歩と距離が詰まる。

「さあ、そんな機器は外そう。安心して、外したって大丈夫だ。それが必要なんだって無意識のうちに洗脳されているんだよ」

周りを見る。みんなの顔から、笑顔が消えていた。困惑。悲しみ。不満。後悔。疑念。一人一人の負の感情が、数日ぶりにそれぞれの顔に現れる。先生の言葉に反応したのだ。そして、それが示す意味を。

幸せな一組が崩壊する。たつた二人のせいで、残り三十八人の樂園が壊されると。

「みんなは反省しなさい！ 二人が参加していなかったことは知ってただろう？ なぜ自分たちだけ幸せになら

うとするんだ？」

やめて。

「みんなが平等に幸せになってこそ意味があるんだ！

エリートにはそれが分かってない！」

それ以上言わないで。

「さあ行こう、ユリさん！ それにチサトさんも！ 一

組を元に戻すんだ！」

そんなこと、私は望んでない。

だけど、先生は目の前に来た。純粹な正義の顔つき、

真剣なまなざし。生徒のことを考え、不平等への義憤を

露わにしている。正しさを信じるいい先生なのだ、きつ

と。先生が救いの左手を差し出す。だから、私は右耳の

上にあるデウス・ワンにゆっくりと手をかけて、息を

吸って、思い切り、力を――

「――ふざけんなああああああああああ!!」

瞬間、チサトが真後ろから走ってきて、先生の顔面に

真つすぐ、全体重を乗せたこぶしの強烈な一撃を食らわ

せた。先生は二メートルほど吹き飛んで、周りの机を巻

き込みながら仰向けに倒れる。大きな音が立ったが、悲

鳴は上がらなかった。チャンネル0のおかげか、周りは極めて冷静だ。そもそも、自分たちの居場所を奪おうとした人間に与える慈悲なんてないのかもしれない。

拳を握って立つチサトを見る。彼女は肩を上下させるほどの荒々しい息遣いで、歯を食いしばりながら涙を流していた。

「ふざけんな！ 不平等？ 優性思想？ 全部あんたの

価値観でしょ！ そんなものに私たちを押し込んで、勝

手に英雄を気取らないで！ 気持ち悪いんだよ！」

「なに、を……！」

先生は咳き込みながら立ち上がろうとする。その歪ん

だ顔には、さっきまでの優しさなんて一ミリも残ってな

かった。あるのは、憎悪。自分の情けを踏みにじったク

ソガキに対する怒りだけだ。

「確かに私はデウス・ワンを装着しなかった。着ける

のが嫌だったし、着けてるやつらが馬鹿だと思ってる

から」

「だから、言ってるじゃないか！ それを強要する社会

が許せない！」

「誰が強要したの？ デウス・ワンは選択できたし、チャネルだって選べた」

「ユリさんのように、追い込まれた人はいる！」

「それでデウス・ワンを止めるわけ？」

「当たり前だろ！ これは一部の人間だけを、幸せにする機器で——」

「だから三十八人を犠牲にするほど、私たちは弱くて情けないっていうの!? 常に負い目を感じさせられて、それこそ感謝を強要される立場がどれだけ惨めか分かってんの!?」

チサトが今度は蹴り飛ばそうとするので、私は慌ててチサトの腕を掴んで引っ張る。

「離して！ こいつは何も分かってない！」

「もうやめてよ！ どっちもおかしいよ！」

「違う！ こいつは、私たちを弱者だって勝手に決めつけて、エゴで救った気になろうと——」

「そうだけど……そうだけど！ 相手を倒したって、傷つけたって、何も解決しないでしょ！」

そこまで叫ぶと、チサトの体から力が徐々に抜けて、

やがて暴れるのをやめた。彼女は地面にへたりこむ先生を睨みつけながら、乱暴に私の手を払いのける。

「チサト……」

「私たちは、私は、弱くなんか、ない」

チサトは息を切らしつつも、体の奥から言葉の一つ一つ力強く吐き出していく。彼女にとって、与えられた優しさや偽善は許せないものなのだと思う。たとえそれが辛くても、乗り越えていけるだけの強さを持って。彼女の表情、握りしめた拳。幸せを生き抜き、自分が自分でいられるために。

「あなたは、どう思ってるの」

凜とした顔に二本の筋を垂らしながら、チサトが私に向かって尋ねてきた。私はかぶりを振って答える。

「そんなの分からないよ。どっちも正しいし、どっちも間違ってる気がする」

「いくじなしッ」

チサトが吐き捨てるように言った。さらさら隠す気もない、明らかな侮蔑の眼差しが私に浴びせられる。ああ、矛先が変わったな、と私は感じ取った。

「正しきなんて自分で決めるものよ。それすら持つていないから、こんな風に付け入られるんでしょ？　そういうの、私からしてもホントに迷惑なの」

いろいろな感情を滲ませた声で、チサトが私を責め立てる。私は……何をやる気も起きない。だって、事実を突きつけられている気がしたから。

「あなたみたいな人がいるから、世の中から自由がなくなる。あなたさえいなければ、私もみんなも幸せだった。馬鹿じゃなかったら、この状況を見て分かるでしょ？」

胸倉を掴まれて、グツとチサトに引き寄せられる。息遣い、鼻をすする音と、わずかな柔らかい香りがする。あらためて間近で見ると、チサトは整った顔立ちをしていた。笑顔さえあれば、自分の芯を持ったミスティアスな子として周りから好かれたことだろう。そして、少しだけ時代が違ったら、きつと、

「お願いだから、消えてよ。あなたは邪魔者なの、ユリさん」

チサトと、分かりあえたような気がした。

二〇四二年十二月一日

コーマージュ

（ある家のリビング。ソファに座る夫婦が、女の子の泣き声を聞いて振り返る）

（床には壊れた玩具と破片と落ちていている。その横で泣いている女の子と、何やら怒っている男の子）

あなたなら、こんな時にどうしますか？

どちらが悪いことをしたのか、問い詰めて叱りますか？　あるいは、仲良くするようにとだけ伝えますか？

残念ながらこれらの方法では、子供たちに優しさを教えることはできません。押し付けでしかないからです。

しかし、これからは違います。

（夫婦は頷き合うと、棚から小さな機器を二つ取り出し、子供たちの左耳の上にそれぞれ装着する）

（すぐに女の子が泣き止み、男の子の表情は和らぐ。二

人の耳の上の機器が、小さく青色の光を放っている)

人が、人と理解し合う時代へ。誰の押し付けもなく、友愛を実現する時代へ。

(女の子と男の子が微笑みながら、お互いに手を繋ぎ合う)

誰もが夢見た世界を、新たな平和を作るのは、私たち自身です。

(機器のアップ。キラキラと光るインジケータ)

すべて、人の幸せのために——デウス・ワン。

フォーチュン・ポップ
コーン

片桐天音

「次は、西鷹砂台、西鷹砂台」

マッチングアプリで出会った女が待ち合わせ場所に指定した駅——保世線の終着駅がおよそ二キロ四方の廃墟に続いているのを思い出したとき、私はやっと自分が騙されていたことに気付いた。久しぶりに好きな顔の女に会える！と舞い上がっていたせいで、列車の行き先さえも気にならなくなっていたらしい。初夏のよく晴れた日盛りに、誰もいないプラットホームで立ち尽くす自分が急に恥ずかしくなる。

鷹砂台団地は、都営保世線の最北端である西鷹砂台駅から徒歩一分の好立地で、数十年前までは三万人ほどが住んでいたという。しかし、少子高齢化、老朽化、コミュニティの硬直化……様々な要因が重なり、今となっては街ごと閉鎖されてすっかり人影もなくなってしまう。浮浪者の侵入や犯罪への利用を防ぐためのガルバリウム鋼板で隙間なく囲われているせいで、今立っている高架のプラットホームからも、薄汚れた大量の高層住宅がそのまま残されていることしか分からない。更新機構が「シャトー」ブランドとして建て替える準備をして

いるとも、国が買い上げて核実験の研究施設に転用するらしいとも言われているが、いずれも噂の域を出ないままだ。

インターネットでよく見かけるルポ記事では、知られざる都内の秘境駅、廃墟に続く異界の駅、地下シェルターに直行する政府専用駅など、思い思いの大げさな二つ名で紹介されている。各記事の主張をまとめてみると、駅に降り立つことはできるものの、周囲が丸ごと立入禁止となっているせいで改札から出られないというだけなのだが、廃墟、怪談、陰謀論……様々な思惑と絡み合っておどろおどろしい雰囲気を放っている。

私はキューピアのトーク画面を開き、私がかこに来る元凶となった女——モモに困惑と非難をぶつけた。

『モモさん、私を騙したんですか？　ここって有名な廃墟駅じゃないですか』『騙してないよ。改札を通ったらすぐだから！』

いや、その改札が通れないってことだから！と思いがら、とりあえず下に降りる階段を探す。

規則的に流れる鳥のさえずりが、ゆるやかに時間を刻

んでいく。このまま帰りの電車を待つて水島橋くらいまで折り返せば百円ほど安く済むかもしれないが、普段は全く乗客のないホームに二時間も座っていれば流石に駅員が気付いて注意しに来るだろう。この暑さの中で耐えても、そもそもジュース代すら浮かないのだ。

階段を降りると、ひんやりとした空気と共にコンパクトな駅構内が目に入る。つやのある鉄紺の小さなタイルが敷き詰められた壁のデザインは古いものの、ところどころに張替えた跡が見えるグレーの床や、上に黄色く光る案内板は、想像よりずっと綺麗で手入れが行き届いていた。左手には北改札、右手には南改札が続いているが、北改札はバリケードで塞がれて通り抜けられない。

一方の南改札では、スピードカーから繰り返し流れる調子の外れたチャイムが通行可能であることを告げている。ただし、五台ほど並んだ自動改札機は、窓口に面した細い通路を残して深緑のターポリンで覆われており、その姿すら確認できない。駅員に事情を話さなければおぼろげには出られないことだろう。

おそろおそろ改札に向かうと、窓口に詰めていた初老

の男が身を乗り出してこちらに訝しげな視線を向けた。くたびれた灰色のスーツを着た白髪交じりの男は制帽も被っておらず、およそ駅員には見えない。守衛のような存在なのだろうか。あるいは、駅員ではなく団地の管理職員なのかもしれない。

「観光客の方？ すみませんが、この先は関係者しか入れないことになってるんですよ」

「はい、ですからここで折り返し改札をしようと思ひまして。精算お願いします」

できるだけ愛想よくそう告げたにもかかわらず、この駅員（名札がないのでこう呼ぶしかない）はさらに私の顔をじろじろ見て首を傾げたかと思うと、今度は何度か端末を操作して面倒そうに顔を上げた。その緩慢で投げやりな所作が老化からくるものか、彼の生来のものかは分からなかったが、誰もいない駅の異界じみた雰囲気

(7) 好みのパーツを組み合わせて検索できるモニタージュースタイ
ルで気軽なデートのマッチングを指向した、いわゆるやれる、アプ
リである。Qの中に♥を配置したローズピンクに白文字のロゴ
で、Q piaと綴る。

せいでどこか不気味に見える。

「……ええと、どなたかにご用でしたら、先にそちらの精算機で「精算、ください」

微妙に会話にならない返答を投げつけたかと思うと、駅員はそのまま窓の向こうに引っ込んでしまおう。まるで、一般人の私がここを通り抜ける資格があるかのような口ぶりだ。今日は誰も私の話を聞いてくれない。私はただこの秘境駅からさっさと立ち去りたいだけなのに！

精算機というのは、窓口の横にある壁に埋め込まれた機械のことだろう。黄色いデザインで都鉄のマークと共に「のりこし精算機」と書かれている。キップの不足料金を支払って精算券と引き換えたり、トラカ(8)に不足料金をチャージできる便利な機械だが、最近では設置されている駅の方が稀である。

大きなタッチパネルには、切符での精算、トラカへのチャージと「アプリ予約の受取り」というメニューが表示されている。

しかし、よく見ると少しおかしな精算機だ。そのボタンには、私がよく知っているマッチングアプリ——私

が今ここにいる理由でもある——キューピアのロゴが表示されていた。半信半疑でQRコードをかざすと、OHEYAbum(9)で見つかりそうなおしよれな部屋の写真が、何枚か3Dカルーセルに載せられてくるくると回り始める。さらに、下に「抽せん」ボタンが表示されたかと思うと、「通行料！初回限定！五千円！」と虹色に光る文字がせり上がってきた。

ガツンと頭を殴られたような感覚に襲われる。ここはスマートカジノなの？ 国宮カジノさえ頓挫したのに、こんなしがない都鉄の構内で？ せめて折り返し(10)の精算くらい普通にやってほしい。非日常に次ぐ非日常に打ちのめされて、本来なら笑えるはずのこの滑稽な風景の前で途方に暮れていた。「今だけ！今すぐ！」とキラキラ輝き続ける広告の文字をぼんやりと見ていると、徐々に頭がボーッとできてしまう。

——思い返してみると、駅員は「どなたかにご用でしたら」と言っていた。彼はもしかして私の行き先を知っているの？ それなら、この先に本当にモモがいるのかもしれない。この謎のガチャを引くことで、本当にモモ

に会えるとしたら？　そうでなくとも、この団地には何か秘密があるはずだ。このスロットマシンじみた計算機だって、ルポでは一度も見たことがなかった。誰も記事には書けなかったのか、あるいは今私の前にだけ現れたのか――

いつの間にか私は、その素性の知れないル、ム、キ、の「抽せん」ボタンを押していた。すると、まばゆい光と共にカールセルの回転速度が増し始める。帰りの電車賃のほうがるかに安いはずなのに、「限定！お得意！」の文字になぜか心が躍っているのを自覚していた。

タッチパネルの表示が固まって数秒、カシャンと小気味いい音を立てて小さなプレートが吐き出された。⁽¹⁰⁾Satanas BLACKの箱に収まる厚さ二ミリほどのアクリルを貼り合わせた黒いカードには、認証のためのアンテナコイルとチップが埋め込まれている。中心に印刷された数字の羅列は、おそらく棟番号と部屋番号だろう。ここに向かえ、ということだろうか。

計算機はもう最初の野暮ったいメニュー画面に戻っていて、まるで私の見ていた光景が夢だったとも言わ

ばかりに静まり返っている。ピン・ポーンと鳴り続けるチャイムが、改札を出て早く先に進めと急かしているように感じられて、私はまた足早に窓口へと向かった。

＊

トラカと購入したルームキーを渡すと、駅員は無言でそれぞれ別の端末を通してからまた私にカードを差し出した。一方は駅でよく見る処理端末だが、もう一方はどこでも買える家庭用のカードリーダーにタッチしていたように見える。

「外部との通信や撮影は制限されておりますので、ご利用の際はどうぞお気を付けてください」

駅員の事務的なアナウンスを背に改札を出ると、目の

(8) 都民カードと紐付いた非接触の乗車券で、個人情報利用方法についてはしばしば問題になっている。

(9) 自分の部屋を撮影してインターネットで紹介できる「キラキラ系SNS」としてリリースされたが、最近ではVR空間のスクリーンショットを投稿するカテゴリが新設されて人気を集めている。

(10) 黒い紙で巻かれた見た目が特徴的な外国たばこ。一箱に十本しか入っておらず、通常のタバコ箱よりも縦に長い。

前の店舗スペースは一面シャッターが降りていた。小さな袖看板から、かつてコンビニとベーカリーが店を構えていたことが分かる。右手の西出口は駅前商店街に続く人通りの多い出口だったらしいが、今はこちらでもシャッターで塞がれていた。

東出口に進むと、団地に続く大きな歩道橋が現れる。遮るものもなく照りつける日差しと、アスファルトから立ち上る熱い空気をかき分けるように進むと、徐々に団地の全体像が見えてくる。五メートルほどある通路の両端は有刺鉄線の付いた背の高いフェンスでぐるりと囲まれていて、部外者の侵入はもちろん、入場者の脱出さえも防ぐかのように細かく赤い警報線が張り巡らされていた。橋の上から見通せる硬い金網の向こうには、片側四車線の広い道路が見渡す限りまっすぐ伸びているが、当然車は一台も走っていない。

歩道橋を渡りきると、道路に面した大きな棟の二階部分に接続する。空中に突き出した茶色いタイル張りの床はいわゆるペDESTリアンデッキで、屋内を経由して中庭まで抜けられるようだ。有刺鉄線のフェンスはここで

団地全体を囲う鋼板の壁に引き継がれ、隙間を埋めるようにぎっくりと溶接されている。

ローマ字と共に鷹砂台団地と記されたゲートの向こうには、かつて団地に併設されていたであろうシャッター街が広がっていた。案内板を見る限りでは、一階は丸ごとスーパーマーケットで、二階は雑貨店や診療所が軒を連ねていたようだ。最盛期は、団地を出ずにこの商店街で生活を完結できていたのだろう。

二階より上は居住区で、各階の廊下から外が見えるように窓が設けられ、横に伸ばした白黒のギンガムチェックのようなのっぺりとした壁が最上階まで続いていた。ホームからはよく見えなかったけれど、上から下まで窓に鉄格子が嵌っている。端に植物のつるをあしらったおしゃれなデザインでイメージアップを図ろうとしているものの、一歩引いて見ればまるで監獄か閉鎖病棟のようだ。

『改札は通れましたけど、いったいモモさんって何者なんですか？』

『あなたに会いたい素敵な女の子！ 早く来てね♥』

どうにも説明の付かない異常な状況なのに、モモの返答は昨日までと変わらない。お得意の軽率なハートマークを見ると、やっぱりどうしてもにまにまにまってしまう。しかし、安心すると同時に、やはり私はまだ騙されているのではないかと疑っていた。何一つ確証がないのだ。

駅員の曖昧なアナウンス、偶然表示された購入画面、そこから偶然出てきたルームキーで部屋に入ったとしても……そこにモモはいないかもしれない。もうここまで来たら引き返すことなんてできないけど。

エントランスを吹き抜ける突風に逆らって奥に進むと、広い中庭と巨大な団地の一端が目に入る。高さ五十メートル⁽¹¹⁾、幅は百メートルほどもある無骨な高層住宅がドミノのように並んでいる様子に圧倒されてしまう。自分の身体が小さくなって、リアルなジオラマに入り込んでしまったような気さえした。その横を通り抜けるように敷地の外から車道が延びていて、路肩では銀色に光る道路標識が静かに制限速度を示し続けている。

さらに車道に沿って進んでいくと、「白タクには乗らないでください」という立て看板が現れる。聞き慣れない

単語だ。調べてみようと思ふとスマホを取り出してみたけれど、圏外を示したままでどちらを向いてもネットには全く繋がらない。さっきまで使えてたはずなのに……と、そこでやっと、通信や撮影が制限されているという駅員の言葉を思い出した。ただ禁止されてるわけじゃなくて、本当に遮断されているらしい。

白タク、タク……タクシーだろうか？ 車に乗るほどの距離ではないと思うけど、この広さなら自転車くらいは持っていたほうが暮らしやすいのかも。

ドミノ通りから少し進むと、ルームキーに記されているC K 1棟が現れた。団地のほぼ南端に位置するこの巨大な居住棟は、高さこそ他の棟と同じだが、幅はたっぷり三百メートルほどもあり、制震対策のためかエレベーターホールを境にしてわずかに三つ折りに曲がっている。これまで見たものよりも比較的新しい外装で、居住者数の増加に対応するために後から建てられた棟なのだろう。

(11) 編注・建築基準法と消防法の制限があるため、実際は四十五メートルだったと思われる。

さらに南に回って目の前が西側のエントランスで、日に焼けてひび割れた古い団地の地図が私を出迎えた。額を拭いながら棟を見上げると、全ての部屋に乳白色のガラスかアクリルが嵌っていて、ギラギラと眩しい光を反射している。強い光の残像のせいか、視線を動かすと窓が遅れてついてくる。カーテンの開閉も含めて、中の様子が全く分からない。普通の団地なら洗濯物や布団、あるいは盆栽でも置いてあるのだろうが、今はがらんどろで大理石の壁でも立っているようにも見える。

ルームキーをかざすと、少し滑りの悪い動きでギギイと音を立てながら自動ドアが開いた。少しほこりっぽいロビーを奥に進むと、古びたエレベーターが三つ並んでいる。左から順に奇数階専用、偶数階専用、そして管理用というラベルが貼られていた。どのエレベーターにもボタンはなく、代わりにキーをかざすための白い読み取りセンサーが埋め込まれている。

試しにルームキーをかざしてみると、呼応して緑のランプが点滅し始めるものの、エレベーターは動く気配もない。あたりを見回すと、掲示板に「エレベーター呼出手

順」という黄ばんだ張り紙が掲げられていて、ルームキーとトラカを順に読み込ませる必要があることを示していた。まるでオフィスビルのようなセキュリティだ。

あらためてトラカをかざすと、緑のランプが点灯して扉の向こうからゴウンと大きな音が聞こえた。エレベーターが到着するまであと少し。小さく一呼吸して、モモがいるはずの階へと向かう心の準備を整える。

*

CK1棟は今までの棟とは異なり、廊下がフロアの真ん中を貫いているので、鉄格子越しの空は見えない。代わりに、色あせた吹き付けタイルの壁とブルーグレーに塗られた鉄扉が左右に広がっていた。およそ十メートルの間隔ではしごのように並んだ白熱色のLEDが、つやつやした銀灰色の床を照らしている。しかし、電力を節約しているせいかその光はかなり薄暗かった。

不思議なことに、どの扉もドアスコープの位置に小さな窓が作られていた。十五センチメートルほどの円にくり抜かれた空間に、透明なガラスが嵌められている。住

居の装飾としてはかなり異質だ。ドアスコープの覗き見対策なら、内側にカバーを付けたほうが安上がりなのに。光沢のあるミラーレースのような布で目隠しされていて中は見えないものの、この一年中夕暮れのような廊下から眺めると、まるでお月見でもしている気分になる。

「さて……本当にここにモモがいるのかな」

歩みを進めること数十秒、とうとうルームキーに記された一三三八号室に到着する。特に他の部屋と違った様子はなさそうで、本来インターホンがある位置にはエレベーターと同じカードリーダーが設置されていた。ルームキー、トラカ……と順番にかざすと緑のランプが点灯するが、すぐにドアが開くことはなく、うつすらと中でピン・ポーンというあの調子の外れたチャイムが鳴り始める。さらに数秒待つと――

「ハル！ やつと来てくれた！」

勢いよくドアが開き、中から涼しい風と共に小さな身体が飛び出してきた。キューピアの写真をそのままさらに可愛らしくしたような、明るい茶髪のツインテールで

私好みの幼い童顔がこちらに笑顔を向ける。身長一四五センチ、体重三八キロ、Fカップ……そうプロフィールに記していた彼女はなぜかバスローブ一枚で、隠しきれない大きな胸をさらに強調するようにベルトできゅっと締めていた。

モモに促されて部屋の中に入ると、またも異様な光景が目に入る。内装はピンク、ピンク、ピンク……照明、壁紙やカーテンはもちろん、ソファやクッション、電気ケトルや冷蔵庫に至るまでペールピンクの製品で埋め尽くされていた。かすかにヒーリング・クラシックが流れる部屋を占領しているクイーンベッドには丁寧に天蓋が設えてあり、奥にはやはりピンク色の大きな枕が置かれている。

ただし、追いやられるように隅に置かれた古いスロットマシンだけは、その派手な色合いをそのままにちぐはぐな雰囲気を放っていた。

「……ラブホ？」

いや、俗な言い方はやめよう……まるでお姫様の監獄だ。テレビや電子レンジくらいはあるものの、ダイニン

グキッチンだったろう空間からはコンロも流し台も撤去されており、かつての生活感はある色の壁紙で覆い隠されていた。リノベーションにしても大胆すぎる。

「ポップコーン食べてたの。ハルも食べる？」

モモは、テーブルに置かれた青地に真つ赤なストライプの——資本主義っぽい——食べかけの大きなポップコーンカップを抱えてソファの端に座った。と同時に、目の前のテレビから裸で抱き合う男女の映像が流れ始める。時折聞こえるわざとらしい嬌声はなんとも耳障りに感じるが、モモは映画でも観ているかのようにリラックスした姿でその行為を眺めている。

「あ、ごめん。こういうの嫌だった？」

「いや、女優の顔が好きじゃなくて……あの、モモさん」
「モモでいいよ。私もハルって呼ぶね」

もうさつきからそう呼んでるじゃない、と思いながらテレビに視線を戻すと、ちょうど映像が切り替わって安っぽいBGMと共にインタビュ어가始まっていた。モモは「ガンガンエッチしてくれないとつまらないよね！」と言ってリモコンでテレビを消してから、また

ポップコーンを口に放り込む。そして「座ってよ」と手示すので、私もソファに掛けた。

「ええと……モモ、あなたって、何者なの？」

「あなたに会いたい素敵な女の子！……じゃなくて、ここで色んな人とエッチしてる。お金をもらってね」

「じゃあ、私もモモをお金で買わなきゃいけないの？」

「そういうことに、なるかな」

モモはそれから、団地のシステムと料金について話し始めた。

彼女はずっとこの部屋で（厳密には清掃のたびに向かいの部屋とを行き来して）性的なサービスを提供しているという。ここに来る前にどこにいたかは覚えていない、とも言っていた。何やら事件の匂いを感じるけれど、話し続けるモモの勢いのせいで聞き返せなかった。

改札の通行料だけでなく、さらにここでモモにサービス料を払う必要がある……と、料金はどこかで聞いたようなスタイルだ。家を出たときはお店に行く予定ではなかったけど、いつの間にか巨大な——自由恋愛がはびこる——風俗街に迷い込んでいたらしい。

「ごめんね。騙したつもりはなかったの。でも、私とは会えたからいいでしょ？ 信じてもらえないかもしれないけれど、私、ハルのことをとても気に入ってる」

どうせ、彼女は誰にでもそうやって甘い言葉を囁いているのだろう。しかし、私の手を握って上目遣いですり寄るモモは、彼女の言葉が本音かなんてお世辞か気にならなくなってしまうほどの魅力を放っていた。

*

いくらあざとい風俗嬢に騙されていたとしても、彼女が人身取引でここに連れてこられていたとしても、性欲と期待にまみれた欲求不満な私の身体には関係なかった。

『私のこと弄んで、どういうつもり？ ここ最近、モモとエッチすることしか考えてなかったんだから♥』
『ああっ♥せんせいっ、騙してごめんなさい♥♥ちゃん♥と性欲処理しますからあ♥♥♥』『当たり前でしょっ！ほら、もっと早く舐めてよ。そんなんじやイケないでしよ♥♥』

私を責めるモモの手と、モモを責める私の手が絡み合っている。熱い視線がばちつとぶつかる。時折ピピッと音を立てる白いパネルの中では、経過時間と値段を示すデジタル数字がちらちらと赤い光を放っていた。

*

ピンク色のバスルームから出ると、先にシャワーから上がったモモがケトルでお湯を沸かしていた。

「お茶入れるね。体を冷やすと良くないから、涼しくなってきたら飲んで」

ティーポットの上で細いガラスびんを一振りすると、中から茶褐色をしたハート型のタブレットが四、五粒ほど飛び出す。その上からお湯を注ぐと、タブレットがふわわりと解けて中から茶葉が現れた。扱いやすいように茶葉を固めたものらしい。

その作業を終えると、モモは思い出したようにポップコーンを取り上げて、またさくさくと噛みしめる。

「モモって、ポップコーンが好きなの？」

「んー……大好きってわけじゃないけど、味のあるところ

ろとないところがあるから」「味?」「ほら、食べてみて」
 そう言って、モモがポップコーンを上から一粒取り上げてあーん、と私の口に差し出す。唇で受け取って舌に載せると、ふわりとバターの匂いがした。

「どう?」「ちよつと濃いけど美味しい。塩バター味ね」
 「じゃあ、こっち」……ん、あんまり塩が付いてないかも。薄いね」

軽やかな歯ざわりと共に油っぽい粒を飲み込む。最初の一粒は程よい味付けで、さらに食べ進めると薄くなつて、底には濃い味の粒が残る……よく混ぜずに大量にポップコーンを作ると、だいたいこんな感じだろう。わざわざ食べなくても、当たり前のことのように思えた。
 「薄いのを引いたら濃いのを引きたくなる。濃いのを引いたら、また濃いのが欲しくなる。毎日とっても暇だから、こんなことでも刺激になる……今、かわいそうな子だと思ったでしょ?」

「そんなことないよ。ええと……そう、日常の刺激って大事だよね」

「うん! だから、ハルが来てくれてよかった。やつぱ

り、女の子とのエッチの方が気持ちいいから」

「女の人もここによく来るの?」

「たまにね。でも、やつぱりハルが一番好き。どうせ、信じないと思うけど」

エッチした相手に「好き」と言われるだけで舞い上がってしまった私の単純さよ。赤くなっているであろう頬をごまかすためにテレビを点けると、はだけた花魁風の衣装を羽織った女優が畳の上で股を開いて妖艶な笑みを浮かべていた。モモの視線はまるで猫が動くものを追うように画面に向く。これも、彼女にとっての刺激なんだろうか。

「でもね、こうやって満たされると、どんどん足りなくなっちゃう。ちゃんと気持ちのいいセックスって、ずっとしていたくなるから。思いつくと、とっても寂しくなる」

そう言って、モモは私の身体に腕を回す。まだ暑いはずなのに、モモの身体から伝わる熱は木漏れ日のように心地よかった。たぶん、お互いの鼓動がよく聞こえていたと思う。

「だから、おじさんが好き勝手に私を組み伏せたり、抵抗できないのに叩かれたり……そういう無力感も、嫌いだけどすき。死にそうになってる間も、痛みが残ってる間も、思い出してる間も、嫌な気持ちでいっぱいになる。でも、退屈じゃなくなるから」

なんと言うべきか分からなかった。彼女は退屈と性欲で日常が埋め尽くされた「かわいいそうな子」なのかもしれないけど、団地の外にだって同じような理屈で日々の労働に耐えている都民がたくさんいる。でも、あなただけじゃないから安心して……と言うのも違うだろう。

私が黙ったままでいると、モモがさらに言葉を続けた。「もちろん、おじさんは嫌いよ？　こんなにダサイスロットマシンで喜ぶんだもの」

アンニュイな空気から一転、モモは部屋の隅を指差して唇を尖らせる。かつてのラブホテルにはパチンコ台やスロットマシンを置かなければならないルール——根拠は失念したが——があつたらしいが、もはやここでは懐古主義の発散でしかないだろう。この部屋が彼女の趣味を反映したものだとしたら、あまりに大きすぎる目の上

のたんこぶだ。

「この部屋、桃太郎が生まれた年と一緒になんだったって」

急な話題転換についていけずに「えっ？」と反応すると、モモは「イチサンサンハチ、モモタロー」と棒読みで繰り返した。

「本当に生まれたわけじゃないよ？　ええとね、なんだったっけ……古いアニメ映画なんだけど、一三三八年にタイムトラベルして桃太郎として活躍するんだって」

桃太郎を見つけに行くんじゃないかって、自分が桃太郎になるのか。なんだか変な映画だ。一三三八年……紅巾の乱とか、そのあたりの時代かな。桃太郎の成立も同じ時期なのだろうか。

「キミの名前と一緒にだねって言われても、桃太郎と一緒に緒だなんて嬉しくないし。そういうえば、エッチも下手だった！」

憤慨するモモの話から、ふと疑問が湧く。

「モモって、本名なの？」

「違うよ。あれ、ゲットウっていうの。ツキのモモ」

あれ、とモモが指差す先には、斑の入った深い緑色の

葉が数枚広がつた白い鉢植えが置かれている。茎は太いが緑色で、樹木というよりはバナナのような南国の植物を想起させる。

「可愛い花が咲くと、とってもいい匂いがするらしいの！ だから、モモ」

もう少し経つと、桃の実のような形の蕾を付けるという。モモのように可愛らしい花から漂う月の桃の甘くてスパイシーな香り……と妙な想像を膨らませてみると、料金パネルからピピピッと小さな音が鳴って、終了十分前であることを告げた。

「そろそろ、時間だね。今日は来てくれてありがとう！」

私の身支度を手伝うモモは、最後に「これ、お土産！ 四錠飲んだらキンキューヒニンになるから、使って」と小さくカットしたピルシートを差し出した。「どうして、ピル？」と尋ねると、腰に手を当てて不服そうに理由を話し始める。

「だって、外つてすぐく怖いんでしょ？ 歩いてるだけで襲われるって、テレビで言ってた。好き勝手乱暴されて妊娠までしちゃうかもしれないの……お金も払わ

ず逃げるなんて、どうかしてるよね」

モモが言うには、団地の外ではレイプと強盗がはびこっているから、可愛い上に特に身体が弱い女の子がここで保護されているのだという。だったら、どうしてお金でセックスなんてさせられてるの？と疑問に思わないあたり、どうも彼女の素性にはまだ隠されているところがあるらしい。

「ハルだつてとっても可愛いのに。きっと、ハルは強いからここには呼ばれなかったのね！」

「あのさ……モモ」

「どうしたの？ 延長する？」

モモには分からないところが多すぎる。もう少し彼女に寄り添うべきだと思っただけ、それでも、おそらくあと数分で聞き出せるような事情でもない。また会ったときに訊けばいいだろう。

「ええと……私も、これあげるね」

渡しそびれていたオープンハートのネックレスの箱を握らせると、モモはにつこりと微笑んだ。

「また来てね。きつとよ」

*

モモとのプレイを終えて外に出る。疑問が残る彼女の事情には後ろ髪を引かれるものの、ここ数日の欲求不満が解消されて身体はすっきりとしていた。

「女子○学生って、サイコー!」

「あ、お姉さん。よかつたら、駅まで送るよ」

両手を上げて伏せ字を叫んだポーズのままでおそろおそろ振り返ると、この団地で初めての異常者^{アベラント}と遭遇していた。いつの間近づいていたんだらう。全く気付かなかった。

私にスマホのレンズを向けている謎の女——青いインナーカラーがよく似合うショートヘアの女は、なぜかで安っぽいメイド服でママチャリに乗っていた。ちょうど、デイスカウントストアのコスプレコーナーで見かけるような布地の薄さだ。およそ外出に適した服とは思えないが、スレンダーな彼女にはむしろ似合っているように見えなくもない。

「いや、いいです。近いんで」

恥ずかしさとパニックを押し殺して足早にその場を立ち去ろうとするが、小回りの利く自転車で素早く前に回り込まれた。

「そんなこと言わないでよ。あ、じゃあお腹空かない？奢るから一緒に食べようよ」

胡散臭い笑顔と安っぽいメイド服は、異常な状況に慣れてきたつもり私でさえも受け入れがたい空気を放っていた。だいたい、私の魂の叫びを盗み聞きしたこの女は、どうしてこんなに馴れ馴れしいんだ。理不尽な恥ずかしさが、一周回ってイライラに変わる。こういう人間とは関わらないほうがいいものだ。

「別に、お腹なんて空いてないです」

「じゃあ、おしゃべりだけでいいから!」

それは私にどんな得があるんだ。

とはいえこのまま断り続けていたらホームまで、最寄り駅まで、家まで……と、ずっと付きまとってきそうな勢いにも感じられた。変なマルチ商法の勧誘だったらすぐに帰ればいいし、ここはとりあえず気が済むようにさせた方が安全かもしれない。ここはまだ、レイプと強盗

がはびこってる世紀末ではないんだし。

「……まあ、奢りなら」

「やった！ 僕のことにはサクラって呼んで。キミは？」

「……ハル、です」

キューピアで使っているニックネームだし、知られたって問題ないだろう。

サクラと名乗る女と一緒に「集会所」という案内に沿って道を進むと、一階部分が五つほど教室のように区切られた棟に辿り着いた。その部屋の一つの前に「各種飲物・その他あります」と看板に挙げられている製品名は、既に半分が青いビニールテープで隠されており、長年そこに立っていたことを感じさせる。

「あの……奢るって、団地の中の話ですか？」

「うん。清掃員リムキーパーは来てないから安心して。それに、こんなのが残ってるのって国内でもここだけだし。一度くらい体験しておいて損はないよ」

こんなの？ この何もないフリースペースに何が残ってるって？ 何も聞かされないまま帰り道を大きく東に迂回させられた上に、ただの会議室でコンビニおにぎり

でも渡されたなら、流石にそのまま顔にぶつけて帰ろう。そうしよう。

サクラが慣れたようにがらりと立て付けの悪い引き戸を開けると、突然中に古めかしいデザインの食品や飲料の自販機が所狭しと並んでいる光景——いわゆるオートパーラーだ——が現れる。あれ？ 外からはこんな機械があるようには見えなかった。真ん中には折りたたみの長机とパイプ椅子が並べられていて、簡易な飲食スペースであることが見て取れた。

狐につままれた気分でおそろおそろの中に入ると、甘ったるい匂いとしょっぱい匂いが混ざったむせ返るような空気で満たされている。

「びっくりした？ 感覚操作の研究もしてるんだよね、この団地」

驚く暇もなく、感覚操作というなんとも怪しい言葉が飛び出した。彼女が言うには、団地の敷地全体に強力な電磁波を送り出すアンテナが設置されていて、脳——より厳密には視神経束と蝸牛神経——に直接作用するのだという。スマホが圏外を示しているのも実験の副作用

で、間接的な証拠といえるらしい。その説明によれば、私の叫びも周囲の人間には聞こえていないので、尊厳は保たれたというもののやはり胡散臭い。

「ここも、外から見ると空っぽの集会所だったでしょ？ 中は清掃員の休憩所なんだよ」「鉢合わせたら捕まるじゃないですか」「平気だよ。外の清掃は朝だけだから」

さらに、私がこの休憩所を見つけれなかったことが直接的な証拠だと言うけれど、散々セックスで疲れ切った身体で突然暑さの中を歩かされたのだから、見間違いだって起きやすくなるはずだ。そんな簡単なトリックさえもバれていないような顔をして、サクラは得意げに説明を続ける。

「感覚を操作できるほどの電磁波を浴び続けてたら、8Gなんかより強烈なダメージになるよね。遺伝子も書き換えられちゃうかも」

電磁波、遺伝子操作、8G……SNSで散々見たような単語を耳に直接並べ立てられると、流石に迫力がある。くらくらししてしまうのは、疲れのせいだけではないだろう。

「じゃあ、アルミホイルで頭を覆ってみたら？」「信じてないでしょ」「そういう与太話、もうネットでいっぱい拡散されてるし」「8Gと遺伝子はもちろん冗談だつて。じゃあ、やってみる？ スマホ貸してよ」「会ったばかりの怪しい人に貸すわけじゃないでしょ」

彼女の雰囲気流されて、私の返答も早口になってしまっている気がする。サクラは「しょうがないなあ。見ながら仕込みとか言わないですよ」と言つてスマホを取り出しながらカメラを起動した。そして、画面も見ずに何もない壁に向かってシャッターを押すと、コンマ数秒遅れて画面に写真が表示される。

「ほら、分かる？ ここ、僕たちには見えないシフト表だよ。フジモト、アビコ、コイケ……読める？」

彼女が指した先には、確かにオレンジ色のマークで名前と勤務時間を示す表が貼られているのが見えた。またお得意のトリックだろう。「仕込みとか言わないですよ」というのも、安心感を誘う常套手段だ。

そんなわけない！と思いつながら壁に向かって探るよう手を滑らせていくと、かさり——突然、目の前に油の

染みた紙が現れる。思わず上がった「ひゃっ」という間抜けな声に、サクラは満足げな笑い声を上げる。しかし、シフト表だったはずの面にはざらざらとしたノイズのような白黒のパターンが印刷されているだけで、野線すらも読み取れない。

「団地を歩き回って部屋に行って寄り道して……ここままで、どうして誰にも会わなかったと思う?」「見えなかっただけってこと?」「その通り」「まさか!」

「驚いて振り返ると、その反応は想定済みとでも言うように、サクラはまた準備した写真を何枚か示した。廃墟を歩くスーツ姿の中年、革ジャンにデニムのおじさん、ポロシャツにチノパンの青年……ピントの合わないブレた写真のせいか、まるで心靈写真にも似た趣が感じられる。

「じゃあ、偶然同じ道を向かい合って歩いたら? 空気とぶつかったと思う?」

「急に目の前に出てきたように見える、かな? そのシフト表と一緒にだよ。人間の脳って、網膜の情報をそのまま見てるわけじゃないから」

シフト表が突然見えたときの感覚と、サクラと出会ったときの違和感がピンと繋がった気がした。サクラはそこまでまくしたてるように説明すると、ぼんと膝を叩いて「しゃべりすぎたね。そろそろ水分!」と立ち上がって自販機に向かう。

「まあ、客同士が衝突するケースはあんまり想定してないと思うよ」「どうして?」「だって、ソープランドの廊下で談笑する客はいないでしょ」

水分と称してサクラが買ったのは、徳利を模したボトルにおちよこが付いた日本酒と、箔押しで大きく「炎」「爆」と記された白酒——その他は主家華語でほとんど読めない——と、マヨネーズの袋が付いたシュリンクパックのあたりめだった。たぶん、水分補給にはならないと思う。

サクラが無^(L2)限マッチで少しずつその安っぽい肴を炙っていくと、ほんのり生臭くて香ばしい匂いが立ち上る。やっていることは路地裏の不法飲酒と変わらないのに、見ているとなんとなくお腹が空いてしまう。

「自販機はいくつかあるけど、お酒を売ってるのはここ

だけなんだよね。ハルも好きなものを買っていいよ。今日は僕の奢りだから！」

三百円くらい自分で出せるけど、と思いつながら室内を一周する。うどん、そば、炒飯、アイスクリーム、チーズバーガー、ピザトースト……すっかり食べたい気もするけれど、合成チーズは油っこくて嫌いだ。少し迷って、無難にきつねうどんを注文した。

ボタンを押すと、モーターとベルトが擦れるキュルキュルという音と共にできあがりまでのカウントダウンが始まる。結局のところ、お湯を沸かしてカップ麺を作っているだけなのに、随分と大仰な機械だ。赤い数字が動くのを見てみると、ハルの部屋にあった料金パネルを思い出してなんとなく寂しくなる。

「ハルって可愛いよねえ。僕ね、ハルみたいな顔、すごく好き」「はいはい。ありがとう」「顔だけじゃないよ。きつと、身体の相性もいいと思うんだよねえ」

酒気混じりの熱い吐息が気持ち悪い。幸運にも、完成を告げるブザーが酔っ払いの粗放な口説き文句に横槍を入れる。彼女の言葉を無視して麺をずるずると啜ると、

化学調味料たっぷりのかつお風味だしの香りが口いっぱいに広がった。

「この団地は初めて?」「ええ」「すごいでしょ?」「なんなの、ここ?」

世間話のつもりで投げかけた私の疑問に、酔ったサラは怒りと喜びが混ざったような熱気を込めて立ち上がった。

「分からない? 国営のガチャ風俗だよ! カジノ計画が急に頓挫したと思ったら、まさかこんなところでひっそり金儲けしてるなんて、誰も想像できなかったでしょ?」

名指しで当てられても「いや……」と冷めきった返答しかできない私なんかお構いなしに、サクラは性欲と賭博をくつつけた最高のシステムだと褒めちぎった。財政解決まっしぐら、大減税時代に突入!と大演説を垂れ流す姿を見ていると、今すぐ都知事にでも転向したほうが

(12) 金属製の小さな棒の先に黒い発火装置が付いており、ロックを握りながらざらざらの面に擦って火を出す。燃焼時間は短いものの、マッチ自体は燃えないのでほとんど無限に使える。

よさそうに思えてくる。

「都民カードを仕様と照らし合わせてるときに、謎のフィールドを見つけたんだよね。その断片を辿ったら、この住所とネットワークを見つけたってわけ。ハルは？ どうやってここに来たの？」

「……キューピアで、この子に騙されて」

「分かるな〜！ この子、みんな可愛いもんね。桃源郷すぎて、マンションを解約してこの団地に住んでるんだ。トラカの残高が足りなくて、今は外に出られないけど」

思わず耳を疑う。ここに住んでる、って言った？

「いや、こんなところに住めないでしょ」「住めるさ」「洗濯は？」「自販機のセクシーランジェリーと、無料レンタルのコスプレを拝借してる。見たい？」「いや、見たくない」

「じゃあ、サクラは部屋を転々としながら何日もここで自販機うどんを食べて暮らしてるホームレスってこと？ お互いが見えない特殊な空間だからこそ成り立つ脱法的な戦略だろうけど、どこまでもぶっ飛んだ女だ。」

「何度も使ってたら、通行料だけでも高く付くでしょ？」

「毎回払うならね。でもそれは初心者のすることだ」

得意げに言い放つサクラは、芝居がかったわざとらしい小声でその手口について述べ始める。会ったばかりの私にそんなことを話すなんて、あまりにも軽率に思えるが、私もそれを聞いて彼女をどうこうするつもりはなかった。

「ちよつとシステムに細工をするとね、管理用の精算機でルームキーを引けるんだ。番号も自由に操作できる……というのは言い過ぎだけど」

「管理用の精算機ですって？ そんなの一つも——」

「いや、見えなかつたのだ。この団地では、利用者に都合の悪いものは文字通り視界から隠されているから。それがサクラの言い分だ。」

もちろん、偶然その精算機を見つけたとしても、ボタンを押すだけでキーを発行するような代物ではないだろう。彼女のいう細工、がどんなものかは分からないけれど、そんなに簡単ではないはずだ。

「人間相手にサービスタ料をちよろまかすのは難しいけど

ね。機械ならかなり楽だよ」

「いずれバレるわよ。駅の人も監視してるでしょ」

「ああ、駅員のこと？ あれはただの無能な事務員だから、監査ログにさえ気を付ければ平気だよ。まったく、国家を救う一大プロジェクトなのに、予算だけは少ないんだから」

口ではそう憂えてみせるけど、実際はその不具合を利用して欲望のままにやりたい放題だ。きっと、本心ではこのまま穴だらけの庭で好きなだけ女の子と遊びたいと思っているのだろう。白々しい態度が鼻についた。

「ハルにも教えてあげようか」「別にいい」「どうして？」

「ズルはよくないから」「やだなあ、仕様の範囲内だよ」

「それは言い訳よ」

これ以上彼女といると自分の常識が狂いそうな気がして、やにわにこの場を離れたくなってしまふ。結局自腹だった食事も済んだので「帰る」と立ち上がると、サクラが慌てて私を呼び止めた。

「偽造トラカ。あげるよ。食事代のかわり」「偽造って？」「ダミーの都民カードと紐付いてる」「いない」

いわゆる白トラカというやつだろう。私はホームレスじゃないものと言いつ返すと、サクラは違う違う、と首を振った。

「都民カードに風俗の利用歴が紐付くのって、結構恥ずかしくない？ もちろん、隠れフィールドだから滅多に読まれたりはしないと思うけど」

「それは……確かに」

忘れかけていたけれど、私は国家規模の風俗街に迷い込んでいたのだ。トラカも何度か個人情報流出事故を起こしてるし……カードを受け取ると、サクラは嬉しそうに微笑んだ。

「あのさ、サクラ。感覚操作ってことは、女の子たちも本当は今見えてる姿と違ったりする？」

「このアンテナの精度ではそこまで操作しきれないよ。見せるか、見せないか、あるいはノイズで上書きするか……今まで見たことがあるのはそれくらいかな」

「そう。ありがとう」

スूपと箸を捨てて、容器を返却口に放り込む。プラスチックの丼の裏に「☆大当たり☆」というテープで百

円玉が貼り付けられているのが見えただけ、井はもう私の手を離れてダストシュートの奥へと吸い込まれていった。

*

あれから、私はしばらくあの団地には行かなかった。

この前は不意打ちに近い形で入場させられただけなのだから、当然といえば当然だ。都民カードに履歴が残りがねないというのも、私にとっては大きな抑止力になっていた。

もちろん、サクラに渡された偽造トラカさえ使えば、個人情報と紐付くことはない。しかし、エラーになったらどうしよう、見つかって捕まったらどうしよう……白トラカを改札に通ず瞬間を想像すると、手足がひどく冷たくなって震えが止まらなかった。

ところが、その瞬間は唐突に訪れる。キューピアから、モモのアカウントが消えたのだ。あの一件からモモと私は風俗嬢と客の関係にはなってしまったものの、変わらずやり取りを続けていたし、団地に興味が向かな

かったのもこのせいだ。それなのに……思い出を反芻するだけで収まっていた私の性欲と期待が、むくむくと湧き上がってくるのを感じていた。

あそこに行けばまた会える、きつと会える、会いたいと思っているうちに、いつの間にか私は白トラカを手に西鷹砂台へと向かっていった。残念ながら——いや、当然というべきか——精算機から吐き出されるルームキーは、モモの部屋のものではない。

モモより背が大きくて、モモより胸が小さくて、モモより可愛くない。もちろん、性的なサービス自体はそれなりに気持ちいいけれど、それはむしろモモへの渴望を強めるだけだった。

『ユカリです♥』

「次は、絶対モモのところに行ける」

『ミホです』

「次は、きつとモモのところに行ける」

『カナコです』

「頼む、もう一回だけ……モモ……」

『アリサです♥』

「ねえ、排出どうなってるの……これ……」

精算機に向かうと指先が冷たくなって、足が震えた。入場料だけで一回一万円、サービス料は一〇三万円。部屋に行かずに帰ればいいと思ったこともあるけれど、モモがどの部屋にいるか分からないのに、入場料だけ払ってルームキーを捨てるわけにはいかなかったのだ。ズルはよくないと言い放った手前、サクラに頼ることもできなかった。

この頃には、モモと会えないなら、せめてモモより可愛い子でいいから……という浅ましい願いも頭をよぎっていたが、これも叶うことはなかった。

明らかに小さくない出費なのに、週に三回を超えてしまつて入場を断られることさえあつた。団地に行かなかった夜は、何度も精算機を回す夢を見た。いつしか私は、モモに会いたくて団地に通っているのか、あの指先の冷たさを味わいたくて精算機の前に立っているだけなのか、分からなくなつていた気がする。

*

違和感に気付いたのは、団地に二ヶ月ほど——回数にして二十回ほど——通つた頃のことだった。この団地には、同じ顔の子が何人かいるような気がした。例えば、おとなしい性格の子と話していると、ふとその子が活発で積極的な性格だったことを思い出すという現象が続いたのだ。もちろん、何度も通っているから似たような顔を勘違いしているだけかもしれないけど、それにしてもあまりに奇妙な感覚だった。

そしてそれは、ある日確信となつて私の前に現れる。

「モモ？」

あの可愛らしい顔立ちに、低い背に似合わない大きな胸。喘ぐと子宮（こころ）に来るあの声で「久しぶりだね」と私に笑いかけるのだ。とうとう見つけた！ また会えたんだ！ ……しかし、モモの様子がおかしい。

「あ、はい。モモです。よろしくお願ひします」

「あれ、私のこと、覚えてる？ この前、ネットレスあげたよね？ 持つてる？」

「お、覚えてます！ でも、えーと……ごめんなさい。失くしちゃったかも、しれないです」

失くした？ そんなわけ……と、ぺこりと頭を下げる彼女は、顔立ちこそモモに似ているものの、やはりモモとは歩き方一つ取っても——表情筋の使い方も——違う。よく見ると、私知っているモモより少し背が小さい気がする。それに、大好きなポップコーンさえ抱えていない。不安そうに私を見上げるだけで、性欲を煽り立てるような色気もまるでなかった。

「えーと……モモさんは、ポップコーンは好き？」

「ポップコーン、ですか？ すみません、ほとんど食べたことありません」

「じゃあ、私のことは？ 好きって言うてくれたよね？」

「は、はいっ！ モモ、言いました！ 好きですよ、えーと……ネットワークスの、お方？」

「……」「す、すみません……」「いや、うん」

気になることはたくさんあるけれど、これ以上目の前の少女を問い詰めても、モモについての情報は出てこないだろう。だって、この子はモモじゃないから。モモに似た、違う誰か。きつと、モモの代わりにはならない。

「えーと、ごめん。今日は帰るね」「えっ、困ります」

「お金はちゃんと払うから」「はい、それなら……ご満足いただけず、申し訳ありません」

ふと窓際を見ると、鉢植えから広がる月桃の葉はまだ若く、蕾をつけるまではさらに数年かかることを伺わせる。斑の入った美しい葉にモモの面影を感じて、きゅつと胸が締め付けられた。

一度満たされかけた私の心に降り注いだのは、ありったけの喪失感だけではない。モモが何人もいるかもしれないという不気味な不安、モモという存在自体が揺らぎだす吐きそうな感覚、本当の、モモと再び会えるのかという疑問……モモのことを考えるたびに、彼女のの一つ一つがこぼれ落ちていく気がした。

どうすれば、どうしたら。

*

「サクラ。あなたなら、ここから女の子を連れ出せる？ 一人でいいから」「……んむ？」

遅めの昼食と称して大盛りのうどんを啜っていたサクラの動きが一瞬止まったが、すぐに残りを吸い上げるよ

うに口に流し込んだ。着替えたばかりのメイド服に琥珀色の汁が跳ねる。スープと一緒にじれったそうに麵を飲み込むと、キラキラした目で身を乗り出してきた。

「ハル、かつこいい目してるね。今すぐ連れ帰られて抱かれたくなるよ」「あんたじゃない」「分かっているって」

私は、サクラに先日 of 不可解な出来事について話した。モモが私を忘れていたこと、プレゼントも持っていなかったこと、同じ顔の子が違う性格で出てきていること……ひよつとすると、彼女らは数年で使い捨てられる存在なんじゃないかという予感がすること。サクラは時折「やつぱり、そうか」「いや、しかし」と、気になる相槌で私の話に応えていた。

「要するに……ハルが最初に会った『モモ』に会いたい、と。そして、あわよくばここから連れ出し……いや、救い出したい。そうだよな？」

「ええ」

ちよつと話をまとめようよ、とハルはメッセンジャーバッグからノートを取り出した。まず、二つの部屋とその中にいる二人の女の子を描く。それぞれにA子、B子

と書き込んで、二人を矢印で繋いだ。

「まず、違う人格の同じ子が出てくる話。これはたぶん遺伝子レベルで正しい。そして、同じ部屋からは同じ子が出てくることを考えると、複数のクローンが同時に収容されていると考えるのが自然だと思う」

ハルは右上にのこぎり屋根を描き込むと、そこからさらに二人に点線を伸ばした。どうやらクローン工場のつもりらしい。

「次に、彼女らが使い捨てエフェメラルかもしれないという話。実は僕も、その可能性は少し検討してた。みんなあまりに適齢期すぎるからね。でも、判断材料がない」

「どういう意味？」

「そもそも、電磁波の影響なんて、普通は一生浴び続けて発現するかどうかなんだ。どんなに電磁波が強かったて、十年浴び続けて、十年後にちよつと疲れやすくなるだけかもしれない」

部屋の上に描き込んだ三つの塔から、雷のマークが数本伸びた。A子とB子の目がバツになって、いかにも体調が悪そうな様子に変わるけど、どちらも近くに書き込

まれた疑問符でその不確実性が強調されている。

「電磁波で衰弱死しないとしたら……」「殺処分?」「おそらくは、そう」

口をついて出た物騒な言葉に、自分でも驚いていた。

殺処分? モモが? そんなのあるわけない。でも、あの月桃は決して花を咲かせることはないのだろうという悪い予感が、どうしても拭い去れずにいた。

少しの沈黙の後、ハルは続きを書くのをやめて、一旦ノートを閉じた。

「まあ、それは今気にすることじゃないよ。いちばん重要なのは……どの部屋に行くかってことかな。たぶん、ハルはどの部屋に向かったか覚えてないはずだから」

「そんなわけないでしょ? エレベーターに向かって、トラカをかざして……あれ? でも、南の大きな建物に入ったはず……」

これまで当然のように覚えていると思っていたモモの部屋のことを、なぜか私はすっかり忘れていた。だって、モモは確か、この部屋の番号が何かと同じだと言っていたはずで……なんだっけ? 思い出そうとすると肝

心な部分が飛ばされて、巻き戻してもまた飛ばされる。気持ち悪い。いくら辿っても、記憶があつたという記憶だけがそこに広がっていた。

「だから、こうやって僕たちも電磁波に操作されてるんだよ。南の大きな棟——C K 1棟は一階あたりおよそ四十人……全部で十五階あるとして、六百人は収容できる。下から順に探していけば、きつとどこかにはいるだろうね」

「じゃあ、順番に……」

「そうだね、分からなかったら順番に開けていくのが確実だよ。でも、僕だって一度に何十枚も番号ナ自由指定バのルームキーを出したら流石に気付かれるかもしれない」「じゃあ、一つずつランダムに引いたら? それなら、たくさん引けるでしょう? 順番に探すよりは効率がいいかもしれないし」

私の言葉を聞いて、サクラが大きなため息をつく。

「ガチャの経験は? もちろん、ここ以外でね。まあ、TRPGでもいいけど」「ないわ。TRPGって何?」「だろうね。じゃあ思い出すしかない」

そんなこと、私が一番よく分かっている。自分が行きたい場所のはずなのに、自分で思い出せないなんて。モモはなんと言っていた？ モモは、おじさんが……おじさんが嫌いで……昔の——

「古いアニメ映画で……そうよ、桃太郎！ 桃太郎が出てくる年と同じだった！」

突然立ち上がって叫んだ私の前で、サクラは返す言葉もなくきよとんとしている。タイムトラベルで過去に戻って桃太郎になる話、モモはそんな不思議な映画の話をしていたはずだ。モモと桃太郎が並べられて不快そうな顔をして。思い出した！ 思い出せた！

「桃太郎？」「そう、分からない？」「桃太郎の映画ってこと？」「たぶん……そう」「いや、知らないな」

「だめか……」と落胆する私をよそに、サクラは「いや」と小さく答えて、またノートを開く。

「それだけ分かれば十分。大事なのは、操作される前にメモを取るのだよ。少しシナリオを考えてみるね」

サクラはガリガリとノートに「桃太郎の古いアニメ映画」と何度も書き続けている。「ごめんね、一週間はか

かると思う」と告げる横顔がいつになく凛々しく見えたのを自覚して、私は急に恥ずかしくなった。

*

作戦決行は、彼女の宣言した通り一週間後の夕方となった。真正面からシステムをダウンさせて隙を作るという作戦は、単純かつ強力なダメージを期待できるものの、万が一失敗すれば団地を追い出されるだけでは済まないかもしれない。そうでなくとも、作戦後は管理用端末のセキュリティは強化されてしまうだろう。

ここに残っても追われることになるだけだと予見したサクラは、私たちと一緒に団地を脱出すると告げた。

『まずハルは、駅の精算機でカードキーを引いて通常通りモモの部屋へ行く。しばらく経つと火事か地震の警報が鳴るから、この赤トラカでモモと一緒に屋上に出て』

駅の精算機では、彼女の細工のおかげで待ち望んでいた一三三八号室のキーが吐き出された。両手を上げて喜びたい気持ちを抑え、平静を装って駅員にカードを渡すと、何も気付かないまま白トラカとルームキーが戻され

る。彼はサクラの言う通り、ただの無能だ。

「モモ、久しぶり」

C K 1棟の十三階、一三三八号室——あの日と同じ部屋——の扉が開くと、待ち望んでいた懐かしい顔が私を出迎える。

「ハル！ どうしてここに？」

「また来てね、って言ってたでしょ？」

モモは驚きと喜びに満ちた表情で、部屋に引き入れた私の腰を強く抱きしめる。それを優しく包み込むように背中を撫でると、モモの腕の力が少し弱くなっているのが分かった。彼女は確かにそこにいて、私は彼女とここに立っている。

月桃は、小さな桃の形の蕾を付けていた。

「ハル、ごめんね。今日は——」

モモの言葉を遮るように、ジリリリリリリリリリリリリリリ！と、けたたましい音量のベルが鳴る。待ちに待った再会を果たしたっていうのに、いくらなんでも進捗が早すぎるんじゃないか。それでも、今はサクラの書いたシナリオに従うしかない。

『警報が鳴ったら、すぐにモモを部屋の外に出すこと』

「モモ！ 避難しよう！」

そう言うよりも先に、モモはベッドの下から白い十字のワッペンが貼り付けられたオレンジ色のリュックを引っ張り出している。いわゆる防災リュックだ。床に置いたまま背負って持ち上げようとするけれど、時折ふらつく姿を見ていると、どうにも重そうに見える。

「えーと……それ、重いなら置いていかない？」

「ダメだよ！ もしかしたら、しばらく外で生活しなきゃいけないかもしれないでしょ？ 外は危険なもの。」

ハルの分もちゃんとするから、安心して」

「ええと、そうね……じゃあ、持っていこうか」

あの大きなリュックが災害用のグッズで埋め尽くされているとしたら、おそらくこの先では必要のないものでいっぱいだろう。しかし、ここで説得していたら、脱出が遅れてしまうかもしれない。とりあえず、部屋を出てから考えよう。

『屋上に行けるのは管理用のエレベーターだけ。赤トラカはカードのIDを書き換えられるんだ。ここはIDだ』

けで認証してるから、同じカードが何枚でも作れる』

小さく一呼吸して、真つ赤なカードをセンサーに当てた。サクラの言う通り、ランプが緑色に点灯してエレベーターが動き始める。今は、初めてモモの部屋に向かったときよりも、ずっと緊張していた。そして、いつ本物の管理者^{アドミン}に出くわしてしまうか、捕まったらどうなるのか、悲観的すぎる想像に恐怖していた。手足が冷たくなって小さく震えているのが分かる。

モモと一緒にエレベーターに乗り込むと、彼女はやはり不思議そうな顔をした。エレベーターが上に向かって動き始めると、肩紐を握って背負うようにきゅっと引き上げる。

「ハル、どうして屋上に向かうの？」

「ごめんね、モモ。私、あなたを騙してるの」

「……そっか。じゃあ、これでおあいこだね」

屋上階に着くと、利用者が出入りする居住区とは違って掃除の行き届いていないエレベーターホールが現れる。壁には管理用エレベーターの扉だけではなく、残りの二つの扉があったはずの位置が白くコンクリートで埋

められた跡が残っていた。かつては、居住者用エレベーターでも屋上に移動できたのだろう。

重い扉を押して外に出ると、地上五十メートルの広々とした眺望が現れた。当然、床が清掃された形跡はなく、長年の雨が流れて錆びついた黒い跡がそこら中に走っている。

『屋上から全部の棟を見るんだ。一棟をじっくり見つめるんじゃないくて、まんべんなく眺める。そうすれば、再描画でかなりの負荷がかかるはずだから』

一歩前に踏み出して、階下の景色を眺めていく。ドミノのように計画的に並べられた棟や、中庭をぐるりと囲む棟。赤いアスファルトのひび割れたテニスコートや、雑草の生えそろった小さな野球場、打ち捨てられて錆びついた大きな遊具。

徐々に視線の動きと合わない風景が残像のように乱れ始め、輪切りになった街路樹の幹がフェンスにめり込む。なけなしの自然を楽しめるように壁に印刷された清流の写真や植物の絵は、道路の上でちらつきながら砂のように分解されていった。そうやって、団地のあらゆる

テクスチャが壊れ始めていく。

かつてここには人の暮らしと夢があったはずで、まさかその寿命を終えた後にこんな風に使われるなんて、誰も想像できなかっただろう。そのお粗末で冒瀆的な延命処置がこうして綻びて壊れていく様子は、まるでこの団地の行く末を暗示しているようだった。

『施設内の過半数のノードがダウンすると、システム全体の再起動が始まる』

あとは、全てが壊れるまで待つだけだ。サイレンが鳴り響くまるで世界の終わりみたいな風景の中で、私はモモと手を繋いで静かにそこに立っていた。この棟が音もなく崩れ去って、光の中でモモと一つになってしまう錯覚さえ感じる。

『警報が止んだら、外に出る。この警報で駅に待機している職員が全員出てくるはずなんだ。その隙に三人で電車に乗り込む。自動運転だから、ホームまで辿り着けばこっちのものだよ』

「ねえ、モモ。私と一緒に来てくれない？ 団地の外に。きつと、ポップコーンを食べるより楽しいよ」

できることなら、もう少しモモとあのピンク色の部屋で二人の時間を過ごしたかった。あの部屋は暴力と性欲で退屈を覆い隠す悪循環が支配する場所だったけど、彼女が一三三八号室で小さくてささやかな幸せを集めていたのも、また事実だったから。

「いいよ。ハルが私を守ってくれるんでしょ？ 幸せにしてね」

モモの答えを聞いて、私は胸を撫で下ろす。できることなら日が落ちるまでこの景色を二人ですっと眺めていたかったけど、今はそういうわけにもいかない。テクスチャは徐々に整合性を取り戻しつつあった。急がなきゃ。

「走れる？」「ちょっと難しいかも」「リュックはもういいらないよ。私を守るから」「……うん、そうよね！ それなら走れる！」

防災リュックを屋上に残して、私たちは再び管理用エレベーターに乗り込んだ。闇雲に歩き回ってもエレベーターの動きが早くなるわけではないけど、どうしても小さく足踏みしてしまう。

「モモは、ここにいて幸せだった？」

「ええ。だって、ハルに出会えたんだもの」

エレベーターを降りると、サクラが待つてましたと言わんばかりに仁王立ちでこちらを睨みつけていた——なぜか、黒いチャイナ服で。二人の間に流れるしっとりした空気などお構いなしという風に、手をぐるぐると回してその慌てつづりをアピールし始める。

「思ったより駅員の動きが早い！ 二十秒ほどのズレがある！ 急ごう、今は駅が手薄だ！」

例のママチャリにまたがったサクラは、後ろに乗るように促した。指示された通りに荷台に腰掛けてみるけれど、当然モモも連れて行く必要がある。

「二人いるんだけど」「譲り合って乗ってよ」「無茶言わないで！」「身体が小さいから大丈夫だって」

私たちが言い合うのをよそに、モモが私の身体にしがみついて立位(13)のような、対面座位のような姿勢に持ち込んだ。足を私の後ろに投げ出しているおかげで左右のバランスは取れているが、自転車にバスローブという組み合わせはマニア向けなシチュエーションに思える。

「じゃあ、こうすればいいでしょ。ほら、早く出してよ、サクラさん」

その光景に面食らったような表情を見せたサクラだが、すぐに我に返ってトップギアで走り始めた。脚を上下すると、見た目重視で伸縮性の悪い布地が時折ぶちぶちと音を立てる。なんでチャイナ服なの？

感覚操作が無効になっているせいで、非常ベルを聞いて部屋を飛び出した利用客が、乱れた着衣のまま外に立ち尽くしているのがよく見えた。それと比べれば、私たちの密着したポーズくらいどうってことないこと思えてくる。もう少し待てば、感覚操作が再起動して尊厳は保たれるだろう。

「モモ、ここから先は自分の足で走るよ。できそう？」
「大丈夫、走れるよ」

歩道橋の前まで全速力でペダルを漕いだサクラが、ハンドルにもたれかかって呼吸を整える。流石に疲れてしまったのだろうか。

「いやー、みんな重すぎ！ 行くよ、ハル！ モモ！」

(13) 編注・いわゆる駅弁のことと思われる。

「呼び捨てにしないで！」「モモさん！」「それでよし！」
 ……と思つたけれど、まだまだ元気そうだ。サクラが
 「あと三十秒で出発！ トラカは絶対捨ててね！ 適当
 な駅でごまかして増運賃を払うからそれで！」と叫びな
 がら誰もいない改札を駆け抜ける。

モモが団地に向かつて小さく一札をしてから、私たち
 もサクラの後ろに続いた。

ホームに駆け上がったあたりで後ろを振り向くと、モ
 モが十段ほど下でまたよたと這うように歩みを進めてい
 るのが見える。私に遅れて数秒後、モモは階段を上り
 切つて大きく息を吸つた。

「ねえ、ハル！ 疲れて死んじやいそう！ 今の私、最
 高にドキドキしてる！」

そう叫んで肩で息をするモモが、これまで見た中で一
 番の笑顔で電車に飛び乗つた。

*

私たちが乗り込んだ電車は、定刻通り無事に西鷹砂台
 駅を出発した。次の駅に着くまでほんの数分間、それで

もうこの団地から離れることができる。

「ハル、ごめんね」「どうしたの？」「あのネックレス、
 リュックに置いてきちゃった」「あー……いいよ。また
 買ってあげる」「うん、ありがとー！」

ふと窓の外を見ると、小さくなっていく団地の囲いの
 向こうで、黒い煙が上がっているのが見えた。

システムの再起動中に熱暴走でも起こしたか、あるい
 は電磁波の制御が効かなくなつて火事でも起こつたの
 か。どちらにせよ、あの様子ではしばらくともに営業
 できないだろう。

「もう、団地には戻れなくなつちやつたな」「いや、戻ら
 なくていいでしょ」「家がないんだよ、僕は！」

そういうえば、この風俗狂いはホームレスになつてまで
 あの団地に通り詰めていたのだった。あのハッキングの
 スキルがあれば、仕事くらいすぐに見つかりそうなもの
 だけ。彼女自身もそれは分かっているのだろう。家が
 ないと嘆いている姿も、どこか余裕そうだった。

「しばらく私の家に住む？ 今回は流石にお世話になり
 すぎたし」「いいの？」「私は嫌だな」「モモ、私たちの恩

人だから」「はあい」

家に住まわせるなら、モモの住民登録をしておいたほうがいいかな。団地の子の登録なんてしたことないけど、サクラに頼めばどうにかしてくれるだろう。パートナーシップならスマホ代も安くなりそうだし、大家さんにも説明が付くし。

「じゃあ、月野モモね」「えっ?」「モモの住民票名。リーガルネームツキのモモだから。単純すぎるかな?」

突然のプレゼントに嬉しそうなモモは「ううん、いいと思う!」と照れた顔を取り繕うように大きな声で答えるけれど、それから「月野モモ、月野、モモ……」と何度も反芻しているうちにまた顔が赤くなっていくのが分かる。可愛い。

「いや、今回は桃太郎に救われたんだから、月野桃太郎の方がいいんじゃない?」

「……ハル、私この人のこと嫌い。デリカシーないし、エッチも下手そう」「エッチが下手そうなのはなんとなく分かるかも」「まあまあ、三人で仲良くやろうよ」「あなたと言わないで」「モモ」「だって!」

水を差されて怒ったモモが、私から身を乗り出してサクラを睨みつけるのを宥めているうちに、隣駅のアナウンスが流れて電車が止まる。

「次は、新鷹砂台、新鷹砂台」

私たち以外誰もいなかった車両に、ちらほらと都心に向かう乗客が乗り込んでいく。それは、私たちが少なくとも今はあの団地から逃げ切れたことを意味していた。

たのしい手書きあとがきコーナー

「パチンコをギャンブルだと
思ってる奴は二流」

ありとか

— 先輩の名言 (2021)

「ふたりエスケープ」の衝動的に
散財する感、イイよね…。
みみずのしぞ

「著作権フリー作品を世界中の人に
読んで欲しい」といふ動機で
著作者を殺し数十年前潜
伏しようとした人同士の
裁判官の判決文のお
気持を教えている

① 二田口

楽しくバライズさせていただきました。
ゲーム版の一周目は、電車まで大事に
持っていてリユクが爆発してしまうそうです。

Amane★

ここから「花・カフェ・宝くじ」の感想をお聞かせください！



または、<https://hentaigirls.net/book/flowers-cafe-lottery/feedback/>

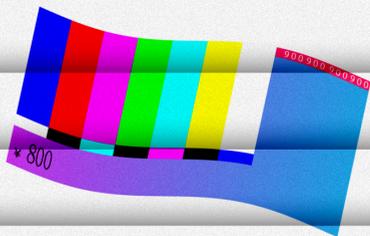
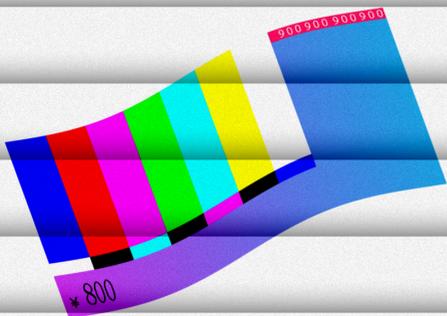
表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。
ライセンスの詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

以下の URL から最新の PDF 版をダウンロードできます。

<https://hentaigirls.net/book/flowers-cafe-lottery/>

書名 花・カフェ・宝くじ
発行日 2021/05/16
発行 変態美少女ふいろそふい。
印刷 文伸印刷株式会社 コミックモール事業部
連絡先 circlemaster@hentaigirls.net



変態美少女ふいろそふい。

